



983  
36



始



納本

岩波文庫

1440

肖像畫・馬車

ゴーゴリ作  
平井驥譯



岩波書店

目	肖像畫	九
目	馬車	一〇七
次	解題	五
次	譯註	一三三

目次



983  
36



~~983  
CG/15  
H. II~~

a983  
36

13269

## 解題

〔肖像畫〕——ゴッリの中篇小説の中で特に面白い『肖像畫』は、初め『狂人日記』や『ネフスキイ街』と共に彼の第三著作集『アラベスキ』の中に收められて、千八百三十五年の一月に出版されたものであるが、作者は殊にこの作に關心を持ち、その後一再ならず改訂を施してゐる。茲に譯出したテキストは千八百四十二年にゴッリが最後に修正を加へたものである。

この作には二つのテーマが取扱はれてゐる——その一つは主人公であるチャルトコフといふ畫家が破滅してゆく経路で、他は、チャルトコフの墮落する原因となつた怖ろしい高利貸の肖像畫の由來である。作の基調となつてゐるのは、世俗的利慾と藝術的理想とは同時に達成することが出来ないといふ思想である。即ち前途有望な天才的畫家が惡魔に唆かされて自己の藝術的理想を裏切り、名聞の奴となり、藝術を利得の手段として、俗衆に阿ねり、人氣繪師に墮してしまふが、ふとしたことで自分の誤りを知り、改めて出直さうとしても最早おそく、つひに發狂して淺ましい最期を遂げるのである。かくの如く藝術はどこまでも純清なものでなければならぬといふ高踏的な見方の他に、ゴッリはこの小説の中で、藝術の手法としての『寫實主義』にも限度があつ

て、われわれを圍繞してゐる現實のすべてが必らずしも藝術描寫の對象とはなり得ないといふ興味ある意見を發表してゐる。高利貸の厭な顔、殊にその怖ろしい眼が餘りにもリアルに肖像に表現されてゐる爲め、それを見る者に恐怖の念を抱かせるのは、寫實の限度を越えてゐるからであるとなし、美人の眞相を知らんとしてその體を解剖すれば却つて人間の醜態を見るばかりであるのと同然だと斷じてゐる。これは初期のロマンチックな作風から脱してやうやくリアリスチックな作風に轉じた當時のゴーゴリが、その寫實主義の本質に自ら一定の規矩を打ち建てようとしたことを物語るもので、既に彼は後代ゾラやモーパッサンに依つて代表された自然主義の浸潤を豫感してゐたかの觀がある。

最後にわれわれはこの小説の中でゴーゴリの藝術の宗教的觀念を窺ふことが出来る。高利貸の肖像を描いた畫家が自らそれと心づかずして實は惡魔の姿を表現してゐたことを知り、修道院へ遁れて難行苦行に依つて罪障消滅を願ふあたり、作者ゴーゴリが藝術の窮極の目的を宗教的使命に置いてゐる證左と見るべきである。

尙この小説でゴーゴリは美術に對する並々ならぬ素養の片鱗を示してゐるが、彼が故郷ウクライナから首都彼得堡へ出た當初、内務省の下級官吏として勤務しながら、その餘暇に美術學校の専科へ通つて繪畫を修めてゐたことは、千八百三十年六月三日附の母へ宛てた手紙の一節でも明

らかな事實である。

(……僕は毎日、午前九時に出勤して、午後三時まで勤務に就き、三時半に午餐を取り、午餐の後、午後五時から美術學校の専科へ出席して繪畫を修得してをります。僕にはどうしても繪を止めることが出来ないのです。それに當地にはその途で完璧の域に達するためのあらゆる機關が具備され、然もそれが努力と勉勵以外には何もものをも要求しないのですから尙更です。畫家や多くの著名な人士との交遊によつて、僕は多くの人には到底及びもつかぬ利便を享受することが出来るのです。(中略)一週に三度出席する美術教室で二時間づつ稽古をします。七時に歸宿して誰なり彼なり友人のところの夜會へ参ります……)

ゴーゴリの自筆になる『檢察官』等の舞臺スケッチやデザインが素人ばなれのした立派なものであることも宜なるかなと頷かれる次第である。

(馬車)——正しく言へば、『輕馬車』——の書かれたのも、『肖像畫』と殆んど同時代で、千八百三十五年ゴーゴリが廿七歳の頃で、この前後には彼得堡大學助教授の職を擲つて、著作集『アラベスキ』を完成し、更にかの不朽の名作『檢察官』の脱稿を急ぎつつ、他方では終世の最大傑作たる『死せる魂』の稿を起す等、作者の創作的意慾の最も旺盛な時代であつた。これは本格的なゴーゴリの短篇小説としては最も短かい小品であるが、作者の獨壇場たる小露西亞もの一つ

で、リアリストとしてのゴーゴリの面目を十分に窺ふことが出来る。殊に作全體にみなぎる明るく微笑ましい諧謔味に至つては、『肖像畫』の陰惨な暗さとは對蹠的なもので、その諷刺にも冷酷な刺がなく、温かい諧謔を以つて人生の傷口を癒さうとする如何にもゴーゴリ的な慈愛の涙がにじんでゐる作である。これまで他の諸作ほど問題にされてはゐないけれど、含味すればするほど滋味豊かなゴーゴリらしい味はひのしみ感じられる愛すべき好短篇である。

昭和十一年十二月

譯者

肖像畫

## 前篇

何處といつて、シチューキン市場の繪草紙屋の前くらゐ、人のたかる處はあるまい。それもその筈で、この店はまるでいろんな下手物の寄せ集めみたいだ。繪は大部分が油繪だが、それに青黒いラックをひいて、どす黒い金縁の額にはめてある。白い樹木のある冬景色、まるで火事が空に反映したやうに眞赤な夕景色、煙管をくはへて挫いたやうな手つきをした、人間といふよりは七面鳥がカフスをはめたのに似てゐる、フランダー風の農夫——かういつたものが大抵その畫題になつてゐる。この他にまだ、羊皮の帽子をかぶつたホズレフ卿の肖像だの、三角帽を戴いた鼻まがりの何とか將軍の肖像だのといつた、銅版畫も少しはある。その上かういふ店の扉には、きまつて、大版の紙に摺つた安つばい錦繪を綴ぢあはせたものが吊してあるが、それは何れも露西亞人の生得の才能を見せたものである。その一枚はミリクトリーサ・キルビーチェヴナ王女の肖像で、もう一枚の方はエルサレムの風景であるが、その民家や寺院が遠慮會釋なしに赤い繪具で塗りたてられ、餘勢あまつて、地面の一部を掠め、手套をはめてお祈りをしてゐる二人の露西亞人の百姓にまで及んでゐようといふ代物である。かうした繪は買ひ手が少ない代りに、見物がい

つも山と集つてゐる。何處かのだらしない下僕に違ひない——仕出屋から取つて來た辨當の入つてゐる提籃（かご）を持つたまま、繪を見ながら欠呻（うげん）をしてゐるが、この鹽梅では定めし旦那はあまり熱くないスープを啜（すす）らされることだらう。その前に一人の兵士が外套をきて突つ立つてゐるが、これは盤繼（ばんけい）市場の紳士で、懷中ナイフを二挺賣りに行くところである。オフタ河岸（がし）邊りの女商人で半靴を一杯つめた箱を抱へたのも立つてゐる。ところで、それらの見物人の心の打ち込み方がそれぞれ違ふ。百姓はきまつて指をつきたがる。兵士達は仔細らしく眺めてゐる。丁稚や小僧はボンチ繪を見てきやつきやつと笑つたり、互ひにからかひ合ふ。粗羅紗の外套をきた老僕たちは何處で欠呻をするのも同じだから繪を見てゐるといふのに過ぎない。女商人たち、露西亞の若い女房連は、他人（ひと）が喋つてゐることなら何でも聴きたい、見てゐるものなら何でも見たいといふ本能から、あたふたと駈けつけるのである。

丁度その時、傍を通りかかつたチャルトコフといふ若い賣家が、何心なく店先に立ちどまつた。古ぼけた外套や不粹な衣服から見て、この男が一心不亂に自分の仕事にばかり没頭して、若い身空ではとかく氣になる服装などには、いつかう構つてゐる暇もないのだといふことが知れる。その男は店先に立ちどまつて、はじめはさうした出来そこなひの繪を見て嘲笑つてゐたが、やがて我にもなく考へこんでしまつた。一體こんな繪が何の役に立つのだらう？ なるほど露西亞人の

ことであるから、エルスラン・ラーザレギッチとか、やたらに飲み食ひをする人とか、（\*）フオマとエリョーマといつた繪なら見もするだらう。それなら別にをかくはしない。何しろ畫題が誰にもお馴染で解りやすいからである。しかし、こんなにでかかど油繪具を塗りこくつた、汚ならしい繪をいつたい誰が買ふだらう？ このマランダー風の百姓だの、赤や青の風景畫だのになると幾らか高尚ぶつて藝術めかしてはゐるけれど、その實、藝術に對する大きな侮辱を曝け出してゐるのだ。全然子供っぽい獨り善がりの作でもなささうだ。それなら、たとへ全體が間の抜けたボンチ繪式のものであつても、何處かにびりつとしたところが現はれてゐさうなものである。ところがそこに見えてゐるのは、ただもう愚鈍さと、頼りない毫（ば）けたやうな無能の跡ばかりで、こんなものは低級な職人仕事といふ方が適はしいのに、自分免許で藝術品になり済ましてゐるのだ。尤も無能なればこそ、その名に反かすこんな職人仕事を藝術と混同してゐるのである。やはり同じ繪具で、同じ描法で、同じ物慣れた、型どほりの腕であるが、それは人の腕といふよりは、粗末な自動人形の腕である！……

少しばかり賣家はさうした汚ならしい繪の前に佇んでゐたが、しまひにはもうそんな繪のことなどは考へてゐなかつた。ところが粗羅紗の外套をきたこの店の主人で、前の日曜以來刺つたことのない髯を蓬々と生やして、灰いろの顔をした親爺が、もう先刻から賣家に向つて喋りつづけ



て、一體どの繪が相手の氣に入つたのやら、どれが欲しいのやら解りもしない癖に、獨りで掛引をして、もうちゃんと値段まで取りきめてしまつてゐた。『この百姓の繪と風景とで白紙幣一枚に願つておきませう。繪は大したもんですぜ！ 全く眼が覺めるやうぢやありませんか。會所から届いたばかりでまだ漆も乾いてゐませんよ。それでなかつたら、この多景色、——これは如何です。十五留に致しておきませう。額縁だけでも相當金目のものではすぜ！ 素晴らしい多景色でさあね！』さう言つて主人は畫布をぼんと弾いたが、おほかたこの多景色が決して脆い代物でないことを見せたかつたのだらう。『ぢやあ、一緒に結へて、後からお届けいたしませうか？ お住ひはどちらでしたかしら？ おい、小僧、紐をもつて來な。』

「ちよつと待つてくれ、さう急かないで。」と、畫家は敏捷な主人が本氣で繪を結へにかかつたのを見て、はじめて夢から覺めたやうに言つた。そして、こんなに長く店先に立つてゐながら何も買はないのは何だか悪いやうに思はれたので、『まあ、待つてくれ。何か買つてもいいやうなものがないか、ひとつ探して見るから。』さう言つて身を屈めると、床の上に堆く積み重ねられた、手擦れがして、埃だらけの、どうやら大事がられてゐさうにない古蔭けた繪を一枚々手にとつて見はじめた。もう何處を探しても恐らく血筋の者はあるまいと思はれる古い一族の肖像畫だの、畫布がきれぎれになつて、何が描いてあるのかさつぱり解らないものだの、箔の落ちた

額縁だのといつた、一口に云へば、儼のはえたやうながらくたばかりだつた。それでも畫家は吐の中で、(どんなことで掘出物にぶつからないにも限らんから)と思ひながら、仔細に選り分けはじめた。彼はよく、かうした安物店のがらくたの中から、偉い巨匠の繪が發見されたといふ話を聞いてゐたからである。

主人はそれと見ると諦らめて、もうぢやほやするのはやめて、いつもの素顔に戻り、然るべき重みを見せて扉口のところへ陣取るなり、片手で店を指さしながら、道ゆく入に呼びかけはじめた。『さあ、いらつしやい、いらつしやい！ 會所から卸したての繪でござい！』かう、存分に呼び立てたが大抵は無駄骨である。そこで今度は、向ふ側の小切れ屋の亭主が矢張り同じやうに自分の店の扉口に立つてゐると、いい加減話しこんでから、ふと店に客のゐることを想ひ出して、見物に背を向けて中へ入つて來た。『どうです、旦那、何か見つかりましたか？』ところが畫家はもう暫らく前から一枚の肖像畫の前に、じつと身動きもせず立ちつくしてゐるのだつた。それは何時かは素晴らしく立派なものだつたに違ひないが、今はわづかに金箔の名残りとどめてゐる、大きな額縁にはまつてゐた。

描かれてゐるのは、青銅いろの顔に頬骨が突き出て、ひどく衰れた老人であつたが、その面差は、よほど激動的な刹那を寫したものと見え、その顔には北國人らしい鈍重なところがなく、南

國的な激しい氣魄が浮んでゐた。老人はゆつたりした亞細亞風の衣服を身につけてゐた。その肖像畫はずるぶん傷んでもをれば、埃にもよこれてゐたが、塵を拂つて見ると、なかなか勝れた畫家の手になつたらしい形跡が窺はれる。まだ完成したものではないやうであるが、その筆勢には驚ろくべきものがあつた。何より非凡なのは眼で、これを描いた畫家がそれに筆力の限りを傾倒し、心魂のすべてを打ちこんだものと見える。それはじつとこちらを睨んでゐる。まるで不可思議な生氣で全體の調子を打ち壞しながら、繪から抜け出しさうな眼つきでこちらをじつと睨んでゐるのだ。畫家はその肖像畫を扉口へ持つて來ると、その眼はいよいよ鋭く睨みつける。見物の連中にも同じやうに思はれたのだらう、畫家の後ろに立つてゐた女などは、「あれ、睨んでるよ！睨んでるよ！」と喚きさま、後退りをしたほどである。何とも言へない不快な氣持になつて、畫家は肖像畫を地面においた。

「如何です、その肖像畫をお買ひ上げ願ひませう！」と主人が言つた。

「幾らだね？」と、畫家が訊ねる。

「そんなのあ、お安く願つておきますよ。七十五哥だけ御散財ねがひませう！」

「駄目々々。」

「ぢやあ、幾らならと仰しやるんで？」

「二十哥さ。」さう言ひすて、畫家は立ち去りさうにした。

「幾ら何でもそれあひどうがせう！二十哥ぢやあ、縁だけだつて買へやしませんぞ。ぢやあ、また明日でも願ふことにしますかね？且那！且那！ちよつとお戻んなすつて！せめても二十哥だけ色をつけておくんないな！ええ、ようがす、負けときませう！二十哥で願つちやいませう！全く、口あけだから負けとくんですぜ。何しろ初のお客さんですからね。」さう言つてから主人は何か變な手眞似をしたが、それはまるで（しやうがない。こんな繪なんか消えて失くなつちまへ！）とでも言つてゐるやうだつた。

こんな譯でチャルトコフは全く思ひがけなく古着けた肖像畫を買つたのであるが、それと同時に、（何だつてこんなものを買つたのだらう？一體これが何になるんだ？）と考へた。しかし、どうも仕方がなかつた。彼はポケットから二十哥銀貨を一つ出して主人に渡すと、その肖像畫を小腕に抱へて歩き出した。途々ふと想ひ出したのは、今やつてしまつた二十哥が後にも先にも自分の全財産だつたといふことである。さう考へると、急に彼の心は暗くなつた。忌々しいと思ふと同時に、どうでもなるやうになれ、といった棄鉢な氣持にもなる。（くそつ！やんなつちやふなあ！）と思はず眩やいたが、露西亞人は何か面白くないことがあると、いつもかういふ氣持になるものである。それからは殆んど機械的に、まるで何事にも無感覺な状態で、足ばやに歩い

た。夕焼けの赤らみがなほ空の半ばを染めて、西に面した家々はまだ、その暖かみのある光りにほんのりと照らされてゐたが、その一方には、冷やかに蒼みを帯びた月の光りがだんだん光度を増しつつあつた。家々や、道ゆく人の足が半透明な薄い影を尾のやうに地に曳いてゐる。やがて畫家は、妙に透きとほつた、あるかなきかの淡い光りに照らされた空の色に次第々々に見惚れはじめたが、(何て微妙な色調だらう!)といふ口の下から、(ちえつ、忌々しい!)といふ愚痴がついて出るのだつた。で、彼は、ともすれば腋の下からずり落ちさうになる肖像畫を抱へ直し抱へ直し、足をはやめた。

疲れきり、びつしより汗をかいて、やうやくワシリエフスキイ島十五丁目のわが家へ辿りつく。と、彼は、汚水が撒きちらされて、犬や猫の足痕だらけの階段を、休み休み、やつとの思ひで登つた。扉を敲いて見たが、何の應へもない。下男は家にゐないらしい。そこで窓に凭りかかつて氣ながに待つてゐると、やがて後ろに登音がして、青いシャツを着た若者が現はれた。それは畫家にとつては助手でもあれば、モデルでもあり、繪具すりでもあれば、掃除夫でもある下男で、掃除をする後から自分の長靴ですぐにまた汚してしまふといつた先生である。この若者はニキータといつて、主人が留守の間はしよつちゆう戶外でばかり暇を潰してゐた。ニキータは長いこと、暗がりですつぱり見當のつかぬ鍵穴へ鍵をさしこまうとして躍起になつてゐたが、やうやくのこ

とで扉があいた。チャルトコフは控室へ入つた。それは恐ろしく寒い部屋で、尤も當人には氣がつかないらしいが、おしなべて畫家の家の控室といへば寒いのが定法である。ニキータに外套も取らせず、そのまま彼は自分の仕事部屋へ入つたが——これはまた眞四角な、ただつ廣いばかりで天井の低い部屋で、窓といふ窓は凍てつき、石膏細工の手の片塊だの、畫布を張つた枠だの、描きかけたばかりのや、なげやりにしてあるスケッチだの、椅子に掛け渡した背景用の布だのといつた、畫家には付きものの、いろんながらくたが置きならべてある。畫家はひどく疲れてゐたので、外套を脱ぎ棄て、持ち歸つた肖像畫を小型な二つの畫布の間へ無雑作に置くと、そのまま狭い長椅子へどつかり腰を下ろしたが、その長椅子は、どう見ても革張りとは言ひかねる。——といふのは、何時かは銅の銚で革が留めてあつた筈であるが、ずつと前から銚は銚、革は革と、てんでに離ればなれになつてゐるので、革の下へはニキータの細工で、穢ない靴下だの、シャツだのといつた、いろんな汚れ物が突つこんであるといふ爲體であるからだ。暫らく腰かけてゐてから、この狭い長椅子の上でどうにか手足の伸される程度で横になると、やがて畫家は蠟燭をもつて來るやうに呟ひつけた。

「蠟燭なんてありませんよ。」といふニキータの挨拶だ。

「何、ないつて?」

「昨夜だつてなかつたぢやありませんか。」と、ニキータが答へた。成程さういへば昨夜も蠟燭はなかつたと気がついて、納得が出来たのか、畫家は黙つてしまった。そこで兎も角、着物をぬいで、恐ろしく着古した寛衣に着換へた。

「あの、それから、大家さんが参りました。」と、ニキータが言つた。

「家賃を取りに来たんだらう！ 分つてるよ。」さう言つて、畫家は手を振つた。

「一人で来たのぢやありません。」と、ニキータが言ふ。

「誰をつれて来たんだい？」

「誰だか知りませんが……分署の巡查です。」

「巡查なんて、どうしたんだらう？」

「どうしてだか知りませんが、何でも家賃を拂はないからつて言つてましたよ。」

「それで一體どうしようてんだい？」

「どうしようつてんか、それは知りませんが、(拂はない氣なら、さつさと立退かせるばかりだ)と言つてましたよ。明日また二人で来るさうです。」

「来るなら来るさ。」と、チャルトコフは妙に淋しい虚勢を張つて言つたが、心は忽ち陰鬱な氣分に歸されてしまった。

このチャルトコフといふ青年は才能に恵まれた前途有望な美術家で、その筆勢は、火花のやうな一觸によつて、觀察や着想や、ひろく自然に近づかんとする旺んな衝動を示してゐた。「用心をし給へよ、君」と、彼の恩師は一再ならず言ひ聽かせたものである。「君には才能があるが、それを臺無しにするやうでは駄目だよ。だが、君はどうも忍耐力が乏しいから、何か一つのこと心に心を惹かれるか、氣に入るかすると、それにばかり夢中になつて、他のことはまるでくだらないとばかりに、一切見むきもなくなる。だが、決して人氣とり繪師にはならないことだよ。もう今から君は、どうも繪具がひどく目立つ氣味があり、圍取りも嚴密ではなく、どうかすると全然力が抜けて、線にもごまかしがある。何でもばつと人目を惹くところばかり狙つて、俗受けのしさうな彩色に憂身を襲してゐるやうだが——うつかりすると、すつかり英吉利繪に墮してしまふよ。氣をつけ給へ、君はそろそろ世間態が氣になりだしたと見えて、ちよいちよい洒落たハンケチを頸に巻いたり、けばけばしい帽子をかぶつたりしてゐるやうだが……なるほど陥り易い誘惑で、金を目的に俗受けのする繪や肖像畫もつい描きたくなるかも知れないが、そんなことをすれば才能は減びこそすれ、伸びはせん。辛抱が肝腎だよ。どんな仕事でも、念には念を入れてやることだ。洒落つ氣なんか打つちやつてしまひ給へ。他人が金を儲けるなら儲けさせておくさ——何も君の分まで失くなる譯ぢやないからね。」



この肖像なんか、全く、そんなよそらの流行畫家の描く肖像畫などより、よつほど良いと思ふけれど。本營にどうしたといふんだ？ おれだつて、他の奴等に負けないやうに、ばつと派手にもやれば、彼奴らと同じやうに金持にだつてなれるのに、何をかう苦しんだり、いつまでも費生のやうに、いろはの手習ひばかりやつてるんだらう？』

と、かう言つたところで畫家はさつと顔色を變へて、俄かにぶるぶる震へ出した。そこに置いてある襦袢の蔭から、誰かが引きつるやうな不氣味な顔を覗けてこちらを睨んでゐる。物凄しい二つの眼が今にも取つて喰ひさうな視線を向けて、聲をたてて見ろ、ただは措かぬぞと言ひさうな口つきをしてゐる。ぎよつとした彼は、危く聲を立てて、もう控室で蟻のやうな軋をかいて寐てゐるニキータを呼ばうとしたが、急に思ひとまつて笑ひ出した。恐怖の念は忽ち消えて、氣がついて見れば、それは自分が買つて來た例の肖像畫であることを、ついつかり忘れてゐたのである。部屋の中へさしこんだ月の光が肖像畫にも當つて、變に生々として見せたのである。そこで彼はつくづく眺めながら、その掃除にかかつた。先づ海綿に水を浸して、それで何度も擦つて、積つた塵やこびりついた汚れを大方ぬぐひ落してから、前面の壁に掛けて見ると、いよいよ非凡の作であるのに驚ろいた。顔全體がまるで生き返つたやうになり、兩の眼が餘りにじつとこちらを見つめてゐるので、しまひに畫家は思はず身震ひをして、たちまちと後退りをしながら、殘消

た聲で、『睨んでる、睨んでる、生きた人間のやうな眼で睨んでる！』と口走つたほどである。この時ふと彼の胸に浮んだのは、ずつと前に恩師から聴いた、有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの描いた或る肖像畫の話である。かの偉大なる巨匠は數年間その肖像畫にかかつてゐながら、何時まで経つても、もうこれでいいと言はない。しかもワザリーの言ふところでは、その繪は彌が上にも見事に完成した藝術品として萬人渴仰の的となつてゐたとのこと。殊に何より仕上げの素晴らしいのはその眼で、これを見ては驚ろかぬ者がなくらゐ——極々細かい、見えるか見えぬほどの毛細管までが漏らさず畫面に現はしてあつたといふ。しかし今この眼の前にある肖像畫には何か不思議なところがある。もうかうなると藝術ではない。肖像そのものの調和までが、そのために打ちこはされてゐる。これは生きてゐる人間の眼だ！ まるで生きた人間の顔から抉り抜いて、ここへ嵌めたもののやうに思はれる。選んだ題材がどんな怖ろしいものでも、藝術家の手に成つたものは、見れば見るほど高尚な悦びが心をそそるものであるが、この繪を見ると妙に病的な、何ともいへぬ不快な氣持になる。『一體どうしたのだらう？』と、思はず畫家は自分で自分に訊ねるのだつた。『これは然し實物そのまま、生きたモデルそのまま。それにしてもどうしてこんな變な、不快な感じがするのだらう？ それとも奴隷的に、文字どほり實物を模寫するといふことが既に間違つてゐて、そのために突拍子もない嘘み聲を張りあげたやうなことになる

のだらうか？ それともただ無關心に、何の感興もなく、對象に心を打ち込みもせずにものを寫すと、必然的にその實際の厭なところだけが現はれて、萬象の裡にかくれてゐる或る測り知られぬ精神に照らし出されることがなく、宛かも美人の眞相を究めようと思つて解剖刀で内臓を切り開いて見ても、眼に入るのは人間の醜狀にすぎないのと同然だらうか？ 平凡な、いつかう取るに足らぬ自然でも、或る畫家が手がけると、一種の光彩を帯びて、少しもいやな感銘を與へないばかりか、却つて何となく心が慰められて、それを見た後では周囲の萬象が以前よりも穏やかになだらかに推移するもののやうに思はれるのは何故だらう？ とところが、その同じ自然でも、他の畫家の手にかかるると、矢張り同じやうにありのままが寫してあつても、厭な、汚ならしいものに見えるのは何故だらう？ いや、いや、これはその中に何か光彩を添へるものが缺けてゐるからだ。自然の景色にしても同じことで、どんなに素晴らしい絶景でも、空に太陽といふものがなかつたら、矢張り何か物足りないにきまつてゐるから。』

もう一度その不思議な眼を見ようと思つて彼は肖像畫の傍へ近寄つたが、いかにも睨みつけられるやうなので、思はずぞつとした。最早これは生人を寫したものではない。墓穴から起ちあがつた死人の顔を照らしてゐるに違ひない、あの奇怪な生々々しさである。自づと夢幻のやうなものを齎して、萬象を白晝とは全く反對の姿に變へる月光のせるか、それとも他に何か原因があつて

か、兎に角、なぜかしら彼は急にこの部屋に一人でゐるのが怖ろしくなつた。彼はそつと肖像の傍をはなれると、外方そつはを向いて、なるべくそちらを見ないやうにしてゐたけれど、眼がひとりでながしめに流眊ながしめになつて、ついそれを見てゐるのであつた。しまひには部屋を歩くのさへ不氣味になつた。今にも誰か後をつけて來さうに思はれて、ともすればびくびくと後ろを振り返つて見た。彼は決して臆病な方ではなかつたが、想像力と神経が鋭敏で、今夜は何故かう無闇に怖ろしいのか、自分ながらさつぱり譯がわからなかつた。隅の方に腰をおろして見たが、ここでも、今にも後ろから誰か肩ごしに顔を覗きこみさうに思はれてならない。控室から聞えて來るニキータの高聲も彼の恐怖の念を拂ひのけなかつた。そこでたうとう彼は眼を伏せたまま、怖々そこを起ちあがると衝立の蔭へ入つて自分の寢臺の上へ身を横たへた。衝立の隙間から月の光に照らされた部屋の中が見え、壁にかけた肖像畫が眞面まへに見える。その兩の眼がいよいよ怖ろしげに、仔細ありげにこちらに注がれて、さながら他のものには眼もくれず、彼の方ばかり睨みつけてゐるやうである。どうにも堪らない氣持になつたので、彼は思ひきつて寢臺から立ちあがると、敷布を摺んで肖像畫に近よりざま、矢庭にそれを包んでしまつた。

かうすると少しは平靜へいせきになつて床につくことが出來たので、畫家といふものの貧困なことや薄命なこと、この先き自分を待つてゐる艱難な荆棘の道のことなどを、それからそれへと考へはじ

めたが、彼の眼は何時とはなくひとりでに、獨立の隙間から、敷布に包んだ肖像畫を見てゐた。月の光をうけて敷布はいよいよ白さを増し、例の怖ろしい眼が布越しに透けて見えるやうにさへ思はれる。そんな馬鹿なことがと、事實を確かめようとしてもするやうに、怖々ながらじつとそれに眼を凝らした。ところが、つひに今は紛ふ方なく……彼は見たのである、まざまざと見たのである……いつの間にか敷布がとれて、肖像畫はすつかりむきだしになつて、邊りの物には一切眼も觸れず、屹ともにも彼を睨みつけてゐる——吐の中まで射透すやうな眼つきでこちらを睨みつけてゐる……。彼の心臓は冷りとした。やがて老人は身動きをしたかと思ふと急に兩手を額縁にかけて體を持ちあげるなり、にゆつとばかりに二本の足を外へ現はして、額縁の中から躍り出した……。獨立の隙間からは空になつた額縁だけが見えてゐる。部屋の中を歩く聲音がして、それがやがて次第に獨立の方へ近づいて来る。哀れな畫家の胸は早鐘を撞きだした。怖ろしさのあまり息を殺しながら、今にも獨立の蔭から老人が顔を出すか出さかと待ち構へてゐると、果して獨立の後ろから、例の青銅いろの顔がにゆつと出て、大きく見開いた眼でじろじろと見まはす。チャルトコフは聲をたてようとあせつたが、頓と聲が出ない。身動きをしよう、何とか體を動かさうともがいたが、手足が動かない。口を開いて、息をつめたまま彼は、だぶだぶした亞細亞風の衣みたいなものを身につけた背の高い、その奇怪な幻像をまじまじ眺めながら、一體どんな目

に逢はされることかと待ち構へた。すると老人は彼のすぐ足許へ腰をおろして、それから例のだぶだぶした着物の下から何か取り出したが、それは袋であつた。老人がその袋の紐を解いて、兩端をつまんで振ると、何か棒のやうに巻いた重さうな包みが幾つも、ずしんと音をたてて床へ落ちた。どれも青い紙に包んで、上に(金一千チェルヲ一ネツ)と記してある。老人は實やかな袖口から長い骨ばつた手を出して、その包みを解きにかかつた。金貨が燦然と光を放つた。畫家は胸も潰れ氣も遠くなるほど苦しく怖ろしかつたけれど、吸ひつけられるやうにその金貨に見入りながら、骨ばつた手で包みが解かれて、びかびかと金貨が光り、ざらざらちやりちやりと鳴つてまたも包まれたりする様を側目もふらずに眺めてゐた。ふと氣がつくと、一つの包みが自分の枕もとの寢臺の脚の傍へ轉がつて來てゐる。彼はわななく手でそれを掴み上げると、見つけられはしなかつたかと、びくびくしながら老人の方を見た。けれど老人はどうやら自分の仕事に氣をとられてゐる様子。やがて包みを取りまよると、それをまた袋の中へ入れて、畫家の方へは眼もくれずに、獨立の外へ出て行つた。だんだん部屋の中を向ふへ歩いて行くらしい聲音を聴きながらも、チャルトコフの胸は激しく動悸を打つた。體ちゆうぶるぶる震へながら、例の包みをしっかりと握りしめてゐると、急にまた足音が獨立の方へ近づいて来る——てつきり老人は、包みが一つ足りないことに氣がついたらしい。果して老人が獨立の向ふからぬつと顔を覗けた。畫家は絶



望に驅られながらも、手の中の包みを碎けんばかりに握りしめて、必死に跳きながら、聲を立てる拍子に——眼が醒めた。

彼は冷汗をびつしよりかいてゐた。心臓はあらん限りの激しきで鼓動し、胸が緊めつけられて、今にも息が止まりさうであつた。『夢だつたのか？』と言つて、両手で頭を押へた。けれど、今見たものは餘りにまざまざとしてゐて、夢らしくなかつた。老人が額縁の中へ入るのを見たのはもう眼が醒めてからのことで、あのだぶだぶした着物の裾もちらと眼についたし、確かについ今しがたまで何か重いものを手に握つてゐた感じがはつきり残つてゐる。月の光が部屋を照らして舊布だの、石膏細工の手だの、椅子にかけたままの背景幕だの、ズボンや汚れつばなしの長襪だのといふものが、薄暗い隅々から明るみへ顔を出してゐる。この時はじめて彼は、自分が寢臺の上に寝てゐるのではなく、肖像畫の前に眞面に突つ立つてゐることに氣がついた。どうしてここまでやつて来たものやら——まるで憶えない。それにも増して驚ろいたことは、確かに掛つてあつた筈の敷布がなくて、肖像がむきだしになつてゐることだ。怖ろしさに立ち竦んだまま、おぼろげ眺めると、生きた眞物のやうな二つの眼が、ひたと自分を睨みつけてゐるではないか。思はず冷汗が顔に噴き出した。その場を離れようとしても、いつかな足が地に吸ひついたやうに動かない。見れば——これはもう決して夢ではない——老人の顔面がびくりと動いたと思ふと、ま

るで彼の生血を吸はうとでもするやうに、その唇がこちらへ伸びて来る……。彼は絶望的にわつと悲鳴をあげて飛び退いた——途端に眼が醒めた。

（これも夢だつたのか？）今にも張り裂けさうな胸の動悸を覚えながら、彼は身のまはりを手で探つて見た。なるほど、寝ついた時のままの姿勢で、寢臺に臥てゐる。眼の前には衝立があつて、月の光りが部屋ちゆうに漲つてゐる。衝立の隙間からは、例の肖像畫が見えるが、さつき自分が包んだとほり、ちやんと敷布に蔽はれてゐる。して見れば矢張り夢だつたのだ！だが、握りしめた手の中には、何かまだ残つてゐるやうな氣がする。心臓の鼓動は氣味が悪いほど激しく、胸は堪へがたく苦しかつた。彼は隙間から覗くやうにしてじつとその敷布に眼を凝らした。すると、その下で手をもがいて撥ねのけようとしてゐるかのやうに、敷布がだんだんずれ落ちさうになるのが、はつきりと見える。（あつ、これはどうしたことだ！）と、無性に十字を切りながら、喚く——と同時に眼が醒めた。

それも矢つ張り夢だつた！前後の辨へもなく、狂氣のやうに彼は寢床から跳ね起きたが、一體これはどうしたことか、さつぱり分らない。夜魔家妖の類ひにうなされたのか、熱に浮かされてのことか、それともまことの幻影を見たのか——頓と見當がつかなくかつた。で、波だつ心や、血管といふ血管を怖ろしい脈搏をうつつ荒れまはる血を少しでも鎮めようと思つて、彼は窓際へ

近よつて小窓をあけた。冷たい何か匂ふやうな風が吹きこんで、氣持がすがすがしくなつた。空にはやや繁く雲が出はじめてゐたが、月光は依然として家の屋根や白壁を照らしてゐた。あたりは森閑としてゐる。時たま遠くの方から馬車の軋む音が聞えて来るのは、たぶん辻馬車屋が遅歸りの客を拾はうとしてゐる中に、不精な駕馬に何處かの横町へ曳きこまれながら、ついつらうつら居睡りをしてゐるのであらう。晝家は小窓から首を出して、長いあひだ外を眺めてゐた。もう空には東雲の近づく氣配が感じられた。やがて睡氣を催して來たので小窓をしめてその場をはなれると、寢臺へ横になるなり、忽ち死んだやうになつて、ぐつすり寝こんでしまつた。

彼はひどくおそくなつて眼をさましたが、中毒した後のやうな、いやな氣分で、頭ががんと不快に痛んだ。部屋の中は薄暗く、外氣もいやにじめじめしてゐて、描きあげた繪や下塗だけした畫布を置きならべた窓の隙間からそれが部屋の中へ入つて來る。我ながら何をしたものでやら何から手をつけたものやら、さつぱり分らないままに、まるで濡れしよぼれた鶏のやうに陰氣なむづかしい顔をして、例の破れ長椅子に腰かけてゐるうちに、ふと昨夜の夢を想ひ出した。想ひ出せば想ひ出すほど、あの夢が息苦しいほどまざまざと眼の前に浮んで、果してあれはただの夢や幻覺だつたらうか、それとも何か別なものであつたのではなからうか、本當に化物が出たのではなかつたらうか、などと疑はしくさへなつて來た。で、彼は敷布をとつて、白日の下でその不

思議な肖像畫をつくづくと眺めた。なるほどその眼はただならぬ生々しきで迫つて來るが、別段これといつて怖ろしいところはなかつた。ただ何とも言ひやうのない、いやな氣持が胸に残るだけであつた。にも拘らず、あれがただの夢であつたとはどうしても信じられないのだ。夢だとしても、その中に何か奇態な、現實の斷片みたいなものがまじつてゐたやうに思はれてならない。老人の眼つきや面持を見ると何か言つてゐるやうである、昨夜は君と一緒にだつたね、とでも言つてゐるさうに思はれる。それから手にも何か重い物を持つてゐた覺えがあつて、たつた今それを誰かに取りあげられたやうな氣がする。もう少し固く握つてゐさへしたら、眼が醒めてからも屹度あの包みが手の中に残つてゐたらうにとさへ思はれるのだつた。

(ええ忌々しい！ あの金の幾分でもあつたらなあ！)と、重い溜息をついて彼は呟やいた。すると夢で見た例の、(金一千チエルヲ一ネツ)と誘惑するやうな上書きのしてある金包みが幾つもころころと袋から振り落される有様が、ありありと心に思ひ出される。包みが解かれて、金貨がびかびかと光り、それがまた紙に包まれる——で、彼はぼんやりとあらぬ方に眼を据ゑたまままるで子供が美味しさうな料理の前に坐つて、他人がそれを食べてゐるのを唾のみこみながらじつと眺めてゐる時のやうに、どうしてもそれが思ひきれずに居づくまつてゐた。

やがて扉を叩く音がしたので、はつと我れにかへつたが、いやな氣持であつた。入つて來たの

は家主と巡査であつたが、もとより巡査などにやつて來られるのは、貧乏人にとつては、金持が無心客の顔を見るより遙かにいやなものである。チャルトコフが住んでゐた、そのささやかなアパートの持主といふのは、いかにもワシリエフスキ島の彼得堡側十五丁目あたりか、それともコロムナの片端れにでも貸家をもつてゐるさうな因業家主の一人で、こんなのは露西亞にはざらにあるが、さてその性質はといふと、着古したフロクコートの色と同じで、一概には定め難い手合である。若い頃にはやかまし屋の大尉で、文官の職務にも就いたことがあつて、部下を管打つことの名人で、尻が軽くて、お洒落で、少し間の抜けた男であつたが、年を取つてからは、さういふはつきりした特徴が一つに融けあつて、妙な一種曖昧な性質になつてしまつたのである。今は驟で、もう役は退いてをり、お洒落もしなければ法螺も吹かず、人に喰つてかかるやうなこともなく、ただお茶を飲みながら、いろんな愚にもつかぬ話をするのが好きで、部屋の中を歩きまはつて、脂蠟燭の燃えさしを直したり、毎月、月末になると几帳面に店子のところを廻つて家賃を集めたり、鍵を持つたまま往來へ出て自分の家の屋根を眺めたり、小舎へかくれてずる寢をしたがる門番を何度となく追ひ出したりする、一口に言へば、さんざ放埒な生活を送り、驛遞馬車に揺られ揺られて暮した擧句、ただつまらない習慣だけを身につけて退職した男であつた。

「まあ、考へても見て下さい、ワルーフ・クジミッチ」と、家主は警官の方へ向き直りながら

両手を擧げて言つた。「どうしてもこの人が家賃を拂ひませんので。」

「だつて金がないんだから仕様がないでせう！ もう少し待つて貰へば、きつと拂ひますよ。」

「ところが、さうさうは待てませんや。」と家主は手にもつてゐた鍵をやけに振り廻しながらむつとして言つた。「わしのところには陸軍中佐のポトゴンキンさんも住んでをられる、もう七年から住んでをられるし、アンナ・ペトロウナ・ブフミステロウさんには納屋や二頭分の厩までお貸ししてあるが、あの方は召使ひを三人も使つてをられる——わしのところには、かういふ方々が住んでをられますのぢや！ あけすけに言へば、わしがそこには家賃を貰はなくともよいといふやうな習慣しぐわいはありませんのさ。たつた今、拂ふものを拂つて、とつと出て行つて貰ひませう！」

「さういふ契約なら、拂はにやいかんねえ。」と、巡査は首をちよつと振つて、制服のボタンに指をかけながら言つた。

「だつて、どうして拂つたらいいのか？ それが問題ですよ。今は一文もないんだから。」

「さういふことなら、君のお手のものでイワン・ペトロウギッチに納得してもらふんぢやね。」と、巡査が言つた。「多分、大家さんも、それなら繪で取つてやると言はれるかも知れんから。」

「そりやいけませんよ、且那、繪は眞平御免です。描いてあるのが勳章をさげた將軍とか、ク\*

トゥーゾフ公爵の肖像で、せめて壁にでも掛けられるやうな代物なら兎も角、この先生の描くのは土百姓ばかりです、シャツを着た百姓だの、繪具を摺る自分とこの下男だのと。よくもあんな豚の肖像なんか描けたもんです！ あん畜生、頸ねつこを叩き折つてくれなきやならん——うちの門の釘をみんな抜いちまやがった、しやうのない悪黨で！ どうです、御覽なさい、描いてあるものを。これあこの部屋ですなあ。描くなら描くで、きちんと片づけて、小ざつぱりしたところを縮にしたらよささうなものを、このとほりありつたけの塵芥をひつちらかしたままが描いてあるのです。まあどうです、この部屋の汚しつぷりは、これぢやあ、どうも堪つたものぢやありませんよ。わしがそこには大佐だの、プフミステローワ・アンナ・ベトロヴナだのといつた、良い借家人が七年間も住んでるのに……。いや、まつたくの話が、畫家くらの性の悪い借家人はありませんよ。まるで豚みたいな生活ふり——いや、もう懲々ですわい。」

何を言はれても哀れな畫家はじつと我慢して聞いてゐなければならなかつた。その間に巡査はそこいらにある繪や習作を見まはしてゐたが、かういふところを見ると、この巡査は家主などより風流氣があつて、美術の方の鑑賞眼も満更ではないらしく思はれた。

ところが、女の裸體を描いた一枚の繪を見つけると、彼は「へつ、」と言つて、その畫布に指を突いた。「こいつあ、どうも……きはどいねえ……。それはさうと、どうしてこんなに鼻の下

が黒いんだね？ これあ煙草でもくつつけたところかね？」

「陰影です。」と、チャルトコフは、見向きもしないで突慥に言つた。

「成程、陰影なら、もつと他へよせたらよからうに、鼻の下ぢやあ、あんまり目立つぢやないかね。」と、巡査は言つた。「これあ誰だね？」と、例の老人の肖像畫の傍へ近寄りながら、彼はつづけた。「ずるぶん怖ろしい顔をしとる。實際こんな怖い顔をしとつたのかね？ あつ、まるで睨んでる！ おつそろしい閻魔面ぢや！ いったい誰を描いたのかね？」

「あ、それは或る……」とチャルトコフが言ひかけて、皆まで言ひきらない時、ぼきんと何か壊れる音がした。巡査があまり強く額縁を握りすぎたものと見え、おまけにその手が巡査らしくがさつ一方に出来てゐたものだから、兩脇の棧が内側へ折れこんで、その一方が床へ落ちるのと同時に、どさりと重さうな音を立てて、青い紙に包んだものがころげ落ちた。チャルトコフの眼には、(金一千チェルヲネツ)と記した上書がばつと映つた。彼は狂人のやうに飛びかかりざまその包みをひつ浚つたが、碎けんばかりにそれを握りしめた手が、重みのために自然と下へさがるのであつた。

「金の音ぢやなかつたかね？」と、巡査は言つたが、何か床の上へ落ちた音は聞いたけれど、チャルトコフが飛びついて拾ひ取つた動作があまり早かつたので、それを見分けることが出来な

かつたのである。

「何を持つてようと、僕の勝手ぢやありませんか？」

「勝手ぢやない、あんたは即刻家賃を拂はにやならんといふのに、金を持つてゐながらそれを拂はうとしない——それあどうしたのだね。」

「いや、今日ぢやうに拂ひます。」

「それぢやあ、何故もつと早く拂はないで、大家さんに心配をかけたなり、警官に世話を焼かせたりするのかね？」

「この金には手を觸れなくなつたからです。しかし今晚きれいに拂つて、明日はさつさと引越しますよ。もうこんな大家のうちにはゐたくありませんからね。」

「それぢやあ、イワン・イワーノギッチ、拂ふさうですからねえ。」と、巡査は家主を顧みて言つた。「それで若し今夜までにちやんと片をつけないうだつたら、その時こそ容赦はしませんぞ、書家さん。」さう言ふと、三角帽をかぶつて、玄關の方へ出て行つた。つづいて家主も出て行つたが、頭を下げて、何か不審らしい様子であつた。

「やれやれ、やつと出て行きやつた！」と、チャルトコフは入口の扉がしまる音を聞いて言つた。控室を差しのぞいて、何か用を呟ひつけてニキータを外へ出してやり、扉を閉めきつて、

まつたく一人ぼつちになると、部屋へ戻り、胸をどきつかせながら包みを解きにかかつた。包みの中身はどれもこれも眞新しい燃え立つばかりの金貨だつた。茫然として金貨の山の前に坐つた彼は、「これあまた夢ぢやないのか？」とまだ半信半疑であつた。包みの中には金貨がかつきり千枚あつて、それは夢で見たのとそつくりそのままの金貨だ。暫らくのあひだは金貨を選り分けたり、と見かう見してゐたが、それでもまだ正氣にかへることが出来なかつた。彼はよく聞く、先祖が孫子の代に身代をすつて、零落することのあるを見越して、そんな時の用心にと、大金を隠し匣ひきだしのついた箱などへ入れておくといふ話を、ふと思ひ出したのである。彼はこんな風に考へた、「(するとこれも何處かの祖父おぢいさんが自分の孫子に残しておくつもりで、先祖代々つたはる肖像畫の額縁の中へ隠しておいたものではあるまいか?)」ロマンチックな妄想に驅られた彼は、これには何か自分の運命と祕密なつながりがあるのではなからうか? この肖像畫の存在と自分自身の存在とは、何か因縁があつて、これが自分の手に入つたのも前世からの約束ではなかつたのだらうか? などとさへ考へだしたほどであつた。彼は好奇心を働らかして肖像畫の額縁を仔細に觀察しはじめた。成程その横側に溝が彫つてあつて、それに小さな板が嵌めてあるが、いかにも手際よく、氣のつかぬやうに出来てゐたので、若しあの巡査のいかつい手がうまい具合に壊してくれなかつたなら、金貨は未來永劫に浮世の風にあたらずじまひになつたことであらう。改

めて肖像畫を見るに、その非凡な手際といひ、殊に並々ならぬ眼の仕上げには今更のやうに驚ろかされる。もう怖ろしいやうには思へないが、それでも矢張り見るたんびに何となくいやな氣持が自然と心に湧くのであつた。(いや、兎も角)と、彼は心の中で呟やいた。(何處の祖父さんかは知らないが、硝子を嵌めて、お禮心に金縁の額へでも入れてやらう。)そこで彼は、眼の前に推く積みあげられた金貨の山へさつと手を伸ばしたが、その手ざはりに胸がぞくぞくと震へた。(さて、こいつをどうして呉れるかな?)と、金貨にじつと眼を凝らしながら思ふのだつた。(これだけあれば、少くとも三年は大丈夫だ。部屋に閉ぢこもつて仕事が出来ぬ。繪具代はたつぷりあるし、飯代も、茶代も、家賃も、その他の生活費も十分あり、もう誰も邪魔をする者も、うるさくやつて来る者もない。そこで先づ立派な人體模型を買はう、それから石膏の胸體と足の模型を注文しよう。それからヴェネーラの像をおごり、名畫の版畫を買ひ集めるんだ。そして賣り物の繪なんぞは描かずに、ものの三年もみつちり修業したら、なんの、彼奴らなんぞみなへこませて、立派な畫家になつてやる。

いかにも分別さうにかう言ふには言つたが、その吐の底ではもう一つの聲が響いてゐて、然もその聲の方が大きくて高かつた。で、もう一度その金貨を見やつた時——彼の内心では、二十二歳の血氣に燃える若さが別のことを囁やいた。これまでは羨やましさうな眼つきで眺めたり、唾

をのみこみながらただ遠くから見惚れたりしてゐただけのものが、今やすべて自分の權力内にあるのだ。さう思つただけで、彼の心はぞくぞくするのであつた。新型の燕尾服を着て、長い間の精進落に美味いものを饜腹つめこみ、立派な借家を借りて、それからすぐに芝居へ行つて、菓子屋へ行つて、それからまだ彼處へも行き、此處へも行かう——さう思ふと、金を掴むなり、もう街りへ飛び出してゐた。

先づはじめに裁縫店へ寄つて、頭为天邊から足の爪先まですつかり服裝を調へたが、まるで子供のやうに絶えず自分の姿を振り返つて眺めたものだ。それから香水だの、ポマードだのを買ひこみ、ネフスキイ街り<sup>ネフスキイ</sup>でふと眼についた、鏡やら一枚硝子の窓のついた素晴らしい借家を言ひ値で借り、或る店では高價な柄附眼鏡をふらふらと買つてしまひ、同じやうにいろんなネクタイを必要以上にしこたま買ひこむ。理髪店で髪を捲かせると、何の用もないのに馬車を驅つて市内を二度も乗り廻す。菓子屋で矢鱈に菓子を食ひ散らしてから、まるで支那帝國と同じやうにうすうす噂に聞いてゐただけの、フランチーズといふ料理店へ入つて行つたものである。そこで彼は腰に手がかつて、かなり傲慢な眼つきで他の客を見やりながら、しかも絶え間なく鏡に向つて捲髪を直しながら、食事をした。それから、これもやはり噂でだけ馴染のシャンパンを一罇あけた。少し酒がまはつて來たので、彼は威勢よく、活潑に、露西亞風に言へば、所謂(惡魔には縁のな

いゝ顔つきになつて街りへ出た。誰彼なしに無遠慮に柄附眼鏡を向けては、いやに氣取つて歩道を歩いて行つた。橋の上でその昔の恩師に出會つたが、見て見ぬふりをして、さつさと傍を通りぬけてしまつたので、舊師は呆氣に取られて、その顔に疑問の色を浮べたまま、暫らくは茫然として橋の上に立ちつくしたものである。

すべての持ち物と、ありつたけの畫架だの、畫布だの、繪だのといつたものを残らず、その晩のうちに、件人の立派な住ひへ運ばせた。目ぼしいものは眼につくところへ並べ、みすぼらしいものは片隅へ押しこんでおいて、彼は絶えず鏡をのぞきながら、豪華な部屋々々を歩き廻つてゐたが、その心には、後とはいはず今すぐにばつと名聲をあげて、天下に自己の存在を示したいといふ已み難い欲望が頭をもたげてゐた。さう思ふと、もう彼の耳には、『チャルトコフ！ チャルトコフ！ 君はチャルトコフの繪を見ましたか？ チャルトコフつて實に素晴らしい筆勢の畫家ですなあ、あれは全く凄う天才ですよ！』などといふ聲が聞えるやうな氣がする。で、まるで有頂天になつて部屋の中を歩きまはつてゐたが、心はあらぬ方へ飛んでゐた。早速翌る日、彼は金貨を十枚ばかり持つて、或る賣れゆきのいい新聞の主筆を訪ねて、何分の援助を依頼した。ところが、新聞記者先生大いにそれを歓迎して、その場で彼を（大先生）と呼び、両手をぐつと握つて名前や父稱や住所などを詳しく訊ねたが、その翌日の新聞には新發明脂蠟燭の廣告の次ぎに、

『稀世の天才チャルトコフについて』といふ推薦文が掲載された。『萬都の激養ある人士に急告して悦びを分たんとするのは、茲にあらゆる點より見て實に大発見があるからである。由來わが國に明眸皓齒の美人の甚だ多いことは何人もこれを是とするところであるが、今日までそれを美はしき畫像として子孫に傳ふべき手段に缺くる所があつた。然るに今やその缺陷は除かれた。といふのは、必要なすべての條件を一身に具備した畫伯が見いだされたからである。今や世の美人は楚々として風の如く輕やかに、春の花に戯れる蝶の如く妖艶なる、快くも妙なる己が姿の美しさ優しさのすべてが、餘すところなく描寫されることを疑はないだらう。尊敬すべき一家の父も、妻子眷屬に圍繞されつつある己れを面のあたり見ることが出來よう。商人も、軍人も、市民も、政治家も——あらゆる人士が一層の勳勵をもつて各自の職務をつづけるであらう。至急、散歩の序で、朋友や従兄弟を訪ひ、華麗なる百貨店を訪づれし歸るさ、何處へ赴きし歸途にもあれ急ぎ訪づれ給へ！ 宏壯なる畫伯の畫室（ネフスキー街何番地）には、ワンダイクやチチアンにも匹敵すべき彼の妙手になる肖像畫が夥しく並べられてある。その眞に迫れる正確なる描寫といひ、明快新鮮なる筆觸といひ、見る者は、その何れに感嘆すべきかを知らないであらう。畫伯よ、お目出たう！ 卿はまことに幸運なる籤を抽き當てたのである。アンドレイ・ベトロキツチ萬歳！（この新聞記者はよほど狎れ狎れしい物言ひが好きであつたらしい。）卿自らの聲價をあげ

ると共に、我等にも榮譽を與へ給へ。吾人は卿が眞價を認むるに決して吝かなる者ではない。門前市をなし、それと共に富も集まりて——たとひ我等が同業の操觚者中には、それを反駁して立つものあらんも——以つて卿が受くべき褒賞とならん。』

畫家はこの廣告を讀んで私かに北叟笑んだ。彼の顔は晴々と輝やいた。たうとう自分のことが新聞に載つた——これは彼にとつては初めての経験である。彼は何度もそれを讀み返した。ワンダイクやチチアンと引き較べられたことが堪らなく嬉しい。『アンドレイ・ペトロローキツチ萬歳!』といふ文句も、ひどく氣に入つた。活字になつた名前と父稱とで呼びかけられるといふやうな名譽は、これまでつひぞ覺えのないことである。彼は足早に部屋の中を歩き出したり、髪を掻きむしつたり、安樂椅子に腰を下ろすかと思ふと、すぐに跳びあがつて長椅子に腰かけるなど——始終、自分が男女の訪問客に應接する身振りを實演してゐるのであつたが、やがて畫布に近づくと、勢ひよく畫筆を揮ふ眞似をやりだした。これはただ優雅な手振りをする稽古のためであつた。

その翌日、入口の鈴が鳴つたので、彼は駆けよつて扉をあけた。入つて來たのは一人の貴婦人で、毛皮つきの仕着外套をきた下僕を伴につれてゐたが、娘と見える十八歳ばかりの令嬢が一緒に入つて來た。

「あなたがムッシュ・チャルトコフでいらつしやいますの?」と、貴婦人が訊ねた。畫家はお辭儀をした。

「新聞でずるぶん御評判でございますが、肖像が大層お上手でいらつしやいますさうですね。」さう言つて貴婦人は柄附眼鏡を眼にあてて、素早く四方の壁を見廻したが、そこには何ひとつなかつた。「あの、肖像畫はどちらにございまして?」

「いま運搬中でした。」と、畫家は少しまごつきながら答へた。「まだこの家へ引越して來たばかりですから、繪はまだ途中にあつて……つまり到着してゐないのです。」

「伊太利へはおいでになつたことがありますか?」さう言つて、貴婦人は柄附眼鏡を相手に向けたが、他には向ける對象が見つからなかつたからである。

「いえ、まだ参りませんが、行きたいとは思つてゐたのです……實は都合でさしあたり延期してをりますやうな次第で……。さあ、どうぞこの安樂椅子へお掛け下さい! さぞお疲れでございませう?」

「有難うございます。馬車に長く乗つてゐたものですから。あら、あすこにお作がございませうのね!」さう言ひながら、貴婦人は反對がはの壁際へ駆けよつて、床に立てかけてあつた習作や標圖や、遠近圖、肖像畫などといったものに柄附眼鏡を向けた。『C'est charmant, Lise, Lise,』



Venez ici. (まあ素敵だわ、リーズ) これはテニエール好みのお部屋なんだよ。ね、御覽！ いろんな物が散らかつてゐてさ、机があつて、半身像だの、手の型だの、パレットだのが戦つてゐるわ。これ埃なんだよ……まあ、埃そつくりだわ！ C'est charmant! (まあ綺麗) こちらの繪は女が顔を洗つてゐるところね——quell jolie figure! (だこと!) おや、これはお百姓ですよ！・リーズ！ リーズ、御覽よ、露西亞風の襦袢を着たお百姓ですよ！ ね、これがお百姓なんだよ！ では、あなたはお百姓ばかりお描きになる譯ではないんですよ？

「なに、それは詰らないものです……ほんの悪戯がきで……習作ですよ……。」

「ねえ、あなたは富節の肖像畫家のことをどうお考へになりました？ ほんとに今時、チチアンのやうな畫家はございませんのね？ 色調にあれだけの力がなく、それにあの……何と申しますか、ちよつと露西亞語では言ひ表はせませんけれど。(この夫人は美術が好きで、伊太利の美術館といふ美術館は残る限なく、この柄附眼鏡をぶらさげて駆け廻つて来た女である) でも、ムッシュー・ノーリ……まあ、あの方だけは本當にお上手ですわ！ 筆致がとても並々ではございませぬもの！ わたくし、チチアンなどよりあの方のお描きになつた顔の方が眞に迫つてゐると思ひますけれど。あの、ムッシュー・ノーリを御存じでいらつしやいまして？」

「そのノーリつて誰のことですか？」と、畫家が訊ねた。

「ムッシュー・ノーリのことです。本當にあの方、天才ですわ！ この子が十二の時に肖像畫を描いて戴きましたが。一度あなたも是非、宅へいらして下さいました。リーズや、アルバムをお目にかけるといいわねえ。あの、實はけふお邪魔にあがりましたのは、この子の肖像を早速お願ひいたしたいのですが。」

「ええ、宜しいとも、直ぐに取りかかりますわ。」と、豫て用意の畫布を張つた畫架を引き出し、パレットを手に取つて、令嬢の蒼白い顔にじつと眼を注いだ。もし彼にして人心の機微を知るのであれば、一目でこの令嬢の顔の中に、そろそろ舞踏會に對する子供らしい情熱が萌しはじめ、畫食前後の長い時間が退屈で堪らなくなりだして、新しい着物を着て散歩に出かけたて仕様がなく、精神や情操を高めるためだといつて母に強ひられる、いろんな藝事に身をいれるのが厭で厭でたまらないといつた形跡を読みとつたことだらう。が、その優しい顔の中に畫家が見て取つたのは、ただ繪筆にとつて如何にも誘惑的な、ほとんど陶器のやうに透きとほる肌いろ、いみじくも微く惱まじげな風情、ほつそりとして美しい頸筋、なよなよとして上品な姿勢だけであつた。そこでもう、これまでは粗野なモデルの荒い輪郭だの、いかつい古代美術だの、古典名畫の複製だの他には頓と縁のなかつた自分の繪筆にも、輕妙艶美な味のあるところを示してやらうと意氣こんでゐたのである。で、彼はもう、そのたをやかな顔の出來榮をまざま

ざと心に思ひ浮べてゐた。

「あの、何と申しますかねえ？」と貴婦人はひどく思ひ入れたつぷりな表情で口を切つた。「わたくし、さう思ふんでございますが……この子は今こんな服装をしてをりますけれど、實はこのやうなありふれた衣裳をつけてゐないところの方がいいと存じますの。もつと簡単な服装で緑の木蔭にでも坐つてをりまして、背景はまあ、野原か何かで、遠くの方に羊の群れか、森が見えてゐるといつたやうなところがよろしいので……なんぞや舞踏會かハイカラな夜會へでも行きさうな様子では面白くございせんわ。まつたく舞踏會などと申しますものは、人の魂を傷つけて、情操を臺なしにしてしまふ位が落でございすからねえ……。よござんすか、なるだけ素朴な姿にお願ひいたしますよ。」(へつ！ その癖、母親の顔にも娘の顔にも、舞踏會で綿のやうに踊りつかれることがまざまざと見えすいてゐるのだ！)

チャルトコフは仕事に取りかかつた。先づ當人を坐らせて、ちよつと頭の中でさうした注文に工夫をこらしたり、畫筆を宙に揮ひながら、肚の中で要點を定めたりして、幾度も眼を瞬いてゐたが、今度はすこし後ろへ退つて遠くから一目眺めておいて、一時間ばかりのうちに大體の下繪を描きあげた。それが巧くいつたのに氣をよくして、いよいよ本式に描きにかかつた。描きにかかる、すつかり仕事に身が入つて、もう何もかも忘れてしまひ、身分の高い貴婦人の前にゐる

こともつい忘れて、ともすれば何かかう美術家らしい所作をやりながら、いろんな聲を出したり、時には鼻唄をうたつたりしはじめたが、これは仕事に心を奪はれてゐる時の藝術家には得てあり勝ちのことである。それどころか、無遠慮にちよつと筆の先で相圖をしては、令嬢に首をあげさせたりするものだから、モデルはたうとうしまひには甚く體を振つたり、すつかり疲れてしまつたといふ様子を示しはじめた。

「もう結構でございますわ、初めの日はこれで澤山でございますわ。」と、夫人が言つた。

「もう少し。」と、夢中になつてしまつた畫家が言ふ。

「いいえ、でももう時間でございますから！ リーズや、もう三時ですよ！」と、夫人は帯のところ金鎖でさげてゐた小さい時計を出して見ながら言つた。そして、「まあ、ずるぶんおそくなつたこと！」と大きな聲を出した。

「もう、ちよつとだけ！」と、チャルトコフは子供が無邪氣に強請む時のやうな聲で言つた。けれど夫人は、もはや彼の藝術上の要求などを顧慮して呉れるどころではなかつたらしく、その代りこの次ぎにはもつとゆつくりするからと約束した。

(ちえつ、忌々しいなあ、)と、チャルトコフは心の中で呟やいた。(やつと油がのつて來たばかりだのに。)そして、ワシリエフスキ島の畫室で仕事をしてゐた頃は誰も邪魔する者もなく、

途中で筆をとめさせる者もなかつたことを想ひ出した。ニキータなどはこちらがどれだけスケッチを取らうと、身動き一つせずにじつと何時までも同じところに坐つてゐたばかりか、どうかすると呟ひつけられた姿勢のまま眠りこんでしまつてゐることさへあつたものだ。で不承々々、畫筆とパレットとを椅子の上において、ぼんやりと畫布の前に立つてゐた。

世馴れた夫人のお世辭を聞いて、彼ははつと我れに返つた。急いで扉口へ駆けよつて、二人を送り出したが、階段の上のところ、ちよいちよい遊びに来てくれとか、次ぎの週には午餐に來て欲しいなどと言はれたので、嬉しさうな顔になつて部屋へ戻つて來た。彼はその貴婦人にすっかり惹きつけられてしまつたのである。これまではかうした人を、何か傍へ寄りつくことも出来ないもののやうに、——從僕には仕着せを着せ、馭者には粹な服装をさせて立派な馬車で乗り廻しながら、見すばらしい身なりをして徒歩でうろついてゐる人間を冷然と見下して行くだけに生まれて來た人のやうに、思ひこんでゐたのである。ところが、不意に、そのうちの一人が自分の部屋を訪つて、肖像を描かせたり、高家の午餐に招待して呉れたのである。彼はこの上もない満足を感じた。すつかり有頂天になつた彼は心祝ひに畫飯をうんとはずみ、夜は芝居を見に行つて、又しても用もないのに馬車で市内を乗り廻した。

それから二三日といふものは、いつもの仕事には全く手がつかかなかつた。ただもう用意をさ

さ怠りなく、呼鈴の鳴るのばかり待ち構へてゐた。すると、例の貴婦人が、顔いろの蒼白い令嬢を伴つてやつて來た。早速二人を坐らせて、畫布を引きよせて描きにかかつたが、この時はもう、ときばきと立ちまはつて、いかにも世馴れた物腰を氣取つてゐた。快晴の日和で、光線の具合もはつきりしてゐて非常に都合がよかつた。なよなよとした令嬢の風情には、捉へて畫布にのせたら嘸かし肖像に品格を添へるだらうと思はれるところが幾らもあり、いま眼の前にゐるモデルの一豔非の打ちどころのない姿そのままをそつくり寫しとつたなら、必らず何か特異のものが出來あがるだらうとも思はれる。他人がまだ眼をつけてゐない新生面を表はすことが出來ると思へば彼の胸は微かに顫へたのであつた。仕事に魂を奪はれ、又もやモデルの高い身分も忘れて一途に心を筆に打ちこんだ。彼はだんだんに自分の手で柔らかない面貌や、十七處女のあの透きとほるばかりなよらかな玉の肌を描き出されるのを、じつと息を殺して見入つたものである。眼に見えるほどの色合は、微かに黄ばんだところから眼の下のほんのり蒼ずんだところまで見逃さず、剩へ額にぼつたり飛び出してゐた小さな吹出物まで、あはや書きこまうとしたが、その時不意に耳許で母夫人の聲がした。『あら、どうしてそんなものを！ そんなものはいらぬでしょ。』と夫人が言つた。『それに、あの……ところどころ……何だか少し黄いろつぽいぢやありませんか、それからね、ここんところが、どうも黒い斑になつてゐて。』畫家は、かうした斑や黄ばんだと

ころが却つて素晴らしい効果を現はして、顔に氣持のいい、ふんわりした調子を添へるものであることを説明しはじめた。が、そんなものは何の調子も添へなければ、効果も上げはしない、それはただあなたにさう思へるだけだと言つて承知しない。『でも、このところだけ、ほんの少し黄いろくさせて下さい』と畫家が他意なく言つても、相手は、それをどうしても聴きいれない。リーズは今日は少し氣分が悪いからで、平素はそんな黄いろいところなどは微塵もなく、この子の顔色はいつも不思議なほど冴えさえてゐると仰つしやる。残念ながら、彼は折角興に乗つて畫布に寫したものを消しにかかつた。ちよつと氣のつかぬ微妙なところがかなり消えて、それと同時に似よりの點も幾分なくなる。そこで構ふことなくありきたりの色をつけはじめたが、それは眼をつむつてゐてもつけられるやうな平凡な色で、そんなものを塗れば、モデルから寫し取つた顔も、まるで初心者の描く構圖の中に見られるやうな、冷たい一種理想的な型にはまつてしまふのである。ところが、自分の氣に食はぬ色ざしがすつかり驅逐されたので、夫人はひどく満足の様子であつた。ただ仕事がかう長びくのは意外だと言つて、聞くところでは二回で肖像畫を描きあげることだつたが、と附け加へた。それには畫家は何とも返事のしやうがなかつた。やがて夫人と令嬢は立ちあがつて、歸り支度をはじめた。で、彼は筆をおいて扉口まで二人を見送つたが、その後しばらくは描きかけの肖像の前にただ茫然と立ちつくしたものである。

ぼんやりとそれを眺めてゐたが、同時に彼の頭の中には、ちやんと自分が著目しながら、我れと扱が手で容赦なく抹殺してしまつた、あの柔らかな女性的な線や、あの微妙な陰影や、やんわりした調子などが去來してゐた。そんなことばかり考へながら、彼はその肖像畫を片よせておいて、何時かずつと前に畫布キャンバスに下描きだけしたまま打つちやつてあつたプシヘーヤの像を何處からか採し出した。それはなかなか巧く描けてゐたが、徹頭徹尾理想的で、ひたすら概念的な線のみで結合された冷たい顔で、生きたところが一向になかつた。所在なさに彼は、先刻ゆくりなくも令嬢の顔の中で見ておいたところを一つ一つ想ひ出しては、プシヘーヤの顔に手を入れにかかつた。彼が捉へておいた線や陰影や調子が、今や全く洗練された形となつてこの像に再現されたが、これは畫家が自然の中で十分に見ておいて、さてそれを離れて自然と同一なものを作り出さうとする時でない、却々かうはゆかぬものである。プシヘーヤは生氣を帯びだして、初めは僅かに仄見えてゐた畫趣が次第にはつきりと形を整へて来る。社交界の若い處女メソヂの顔たちが自つとプシヘーヤに乗りうつつて、それがために眞に獨創的な作品といふことの出来る特異な表現となつたのである。彼は實物から想像したものの總てを部分的に、ところによつては總括的に利用しながら、自分の創作にすつかり熱中してしまつたものと見える。それから數日の間といふものは、それにかかりきりであつた。ちやうどその仕事に没頭してゐるところへ例の母子がやつて來た。彼

は急いでその繪を畫架から取りはづさうとしたが、既におそかつた。二人は疾くも遠くからそれを認めると、思はず手を拍つて感嘆の聲をあげた。

「リーズや！ リーズや！ まあ、何てよく似てゐること！ Superbe, superbe! (羨望ねえ、) まあ、希臘風の衣裳とはほんとにいい思ひつきでしたわ！ まあ、なんて思ひがけないことですう！」

畫家は、二人の嬉しさうなこの思ひ違ひをどう言つて正したらいいかに當惑した。きまりが悪いのので顔を伏せたまま、小聲で、『これはプシヘーヤですよ。』と言つた。

「まあ、プシヘーヤに仕立てて下さいましたの？ C'est charmant! (可愛)』と、母親が微笑みながら言ふと、娘もそれにつれてにつこりした。「ねえリーズ、あんたにはプシヘーヤの姿が本當に一番よく似合ふぢやないの？ Quelle idée délicieuse! (まあ何て素晴らしい思ひつきでせうね!) それにしても何て立派なお手際でせう！ これはまるでコルリツヂそつくりですわ。實のところ、あなたのお手の評判は新聞で拜見したり、人様から伺つたりしてをりましたけれど、これほどのお手のうちとは存じあげませんでしたわ。是非とも、今度はわたくしの肖像もお願ひしなければなりませんわ。』どうやら夫人の方も、プシヘーヤか何かの姿に描いて貰ひたくなつたらしい。

(どうしてやらう?)と、畫家は考へた。(さうして欲しいといふのなら、構ふことはない、)

望みどほりプシヘーヤを身代りにたててやれ!)そこで譯に出してかう言つた。『どうぞ、もうちよつとお坐り下さいませんか。まだ少し手を入れたいところがありますから。』

「あら、でもこの上に手をお入れになつては、またひよつと……これでもう、十分よく似てをりますもの。』

しかし、これはまた例の黄いろをつけられるのを怖れてのことだと察したから、もつと輝やきを増して眼に表情を添へるのだからと言つて二人を安心させた。とはいへ實のところは、餘り氣がさすので、もう少し何とか本人に似せて、まんざら恥知らずだとは言はれたくないと思つたからである。なるほど、手を入れると、プシヘーヤの面影から、やがて、蒼白い令嬢の顔たちがはつきり浮き出して來た。

「もう澤山ですよ！」と母親は、あまり似すぎては困ると思つたのか、そこで筆を止めさせた。そこで畫家は、につこりされるやら、お金を貰ふやら、お世辭を言はれるやら、心をこめて手を廻られるやら、食事に招待されるやら——一口にいへば、數限りない嬉しい謝禮を頂戴して、殊のほか面目を施したのである。

この肖像畫は、市ぢゆうの評判になつた。例の貴婦人がそれを知合の婦人連に見せると、畫家がよく實物に似せながら、しかもそれを極めて美しく描き出してゐる技倆に何れも驚嘆した。そ

の美しさに驚ろく顔には、勿論うらやましきの色が浮んでゐるのであつた。そこでチャルトコフは急に仕事に追はれるやうになつた。まるで市ぢゆうの者が猫も杓子も、彼に肖像を描いて貰ひたがつてゐる觀があつた。入口の鈴は時々刻々に鳴らされた。これは一面からいへば、種々様々な顔が手がけられて、絶えず修業になつて大變結構なことであつた。しかし、生憎どれもこれも扱ひにくい連中ばかりであつた。——ひどくそはそはして、忙しい手合か、でなければ一倍と用の多い社會に屬してゐる人々で、皆がみな怖ろしく性急である。四方八方から、ただ立派に手早くしてくれと請求されるばかりだ。そこで畫家は、入念に仕上げるなどといふことは到底思ひもよらず、すべて筆の輕妙な達者なところで誤魔化してしまひ、ただ大掴みに全體を寫して、どれも似たりよつたりの表現を與へるだけで、微妙な細かいは筆を省くより他はない——つまり、自然のままを精密に寫すといふやうなことは、全く不可能であると覺つたのである。それから忘れてはならないのは、描かせる方に皆それぞれ異つた註文のあることだ。婦人連は何は措いても美しさと氣品が表はされてゐさへすれば、あとのところは、時にはまるで構つてもらはなくてもいい、すべて角張つたところは圓くし、缺點はなるべく目立たぬやうにして、ならうことならすつかり削り取つてもらひたい——つまり、すつかり見惚れてしまふといふほどではなくとも、つくづく見入ることが出来るだけの顔に描いて欲しいといふのが定法である。それがために

いざ描かうとして坐らせる段になると、まつたくこちらが吃驚してしまふやうな顔をする。中には努めて憂鬱さうな顔つきをする女もあれば、夢見るやうな面もちをする女もあり、さうかと思ふと何でもかでも口を小さく見せなければ納まらず、まるでピンの頭ほどの大きさのおちよほ口をする女もある。その癖、どうかよく似せて、無理のない自然なところを描いてくれと言ふのだ。紳士連も婦人方と少しも變りがなかつた。精力的にくつと首を振ぢむけたところを描いてくれといふ人もあれば、感動したやうに上眼をつかふ人もある。近衛の中尉は是非とも眼に軍神マルスが宿つてゐるやうにと言ふ。或る文官はなるべく正直らしく氣高い顔つきで、(常に正義に味方せり)とはつきり書いた書物に手をかけてゐるところと言ふ。初めのうち畫家は、さうしたいろいろな註文を引き受けて全く汗だくになつた。何れも熟と工夫を凝らして、案を練らねばならぬもののみであるのに、與へられる日限はひどく短かかつた。しかし、やがて要領を會得すると、彼はもう少しも苦勞をしなくなつた。ほんの一言二言聞いただけで、先方の希望してゐる繪柄が豫め呑みこめるやうになつたのである。マルスを望む人の顔にはマルスを營てがひ、パイロンを狙ふ人にはパイロン式の姿勢をとらせる。婦人の場合ならば、\*コリンナでござれ、\*ウンディーナでござれ、\*アスパージヤでござれ、お好み次第に何でも喜んで引き受けて、尙こちらから品のいいところを程よくさし加へて描きあげるが、なかなかどうして、氣を悪くされるところか何れも様か

少々ぐらゐ似てゐなくても、さうして欲しいが山々なのである。間もなく彼は、自分の筆の不思議な早さと達者なことに我れながら驚ろくやうになつた。描かせる方は言ふまでもなく大變な満足で、あの人は天才だなどと言ひはやす。

チャルトコフは、どの點から見ても一端の人氣畫家になつてしまつた。馬車を驅つて食事にも行けば、貴婦人を伴つて畫廊や散策にさへ出かける、粹な服装もすれば、人に向つて、畫家は社交界に入つてゐなければならぬとか、美術家としての體面を保たねばならないとか、靴屋のやうな身なりをしてゐる畫家に限つて禮儀をわきまへず、高い氣品を保つことを知らぬ山出したななどと公言した。家では畫室を素晴らしく綺麗に、きちんと片つけて、立派な從僕を二人まで抱へ、粹な畫學生を出入りさせて、日に何回となくいろんな朝衣モイニヤに着換へ、髪を捲いて、訪問者を迎へる態度をいろいろと工夫し、殊に婦人連に快い印象を與へるため、あらゆる手段をつくして自分の外見を飾るといつた鹽梅で、一言にして言へば、東の間に見違へるやうになつて、これが曾てはワシリエフスキ島の陋屋で、人知れずこつこつと勉強してゐた、あの貧乏畫家であらうなどとは、どうしても思はれなくなつてしまつたのである。畫家や美術についても、實に手巖しいことを言ふやうになつて、昔の畫家はあまりに買ひかぶられ過ぎてゐる、あの連中の描いたものはラファエルの繪にしたつて、人間といふよりは、干鍊の化物だ、ただ見る者の方で何か神聖なも

のであるやうに思ひこんでかかるから、そんな風に思はれるだけのことで、ラファエルの繪にしても一から十まで傑作といふ譯ではなく、大部分は昔からの言ひ傳へで名作といふことになつてゐるにすぎない。ミケランジェロにしても解剖學の知識だけを鼻にかけた大法螺吹きにすぎず、その作には優美なところなど藥にするほどのない。眞の光彩なり、筆力なり、色澤なりは現代に求めるより他はない、などと言ふ。そこで勢ひ話頭が自分自身のことにと轉じて來る。「いや、頓と合點がゆきませんよ、」と彼は言つたものだ。「じつと坐つて、こつこつと仕事に没頭してゐる畫家の根氣のよさが、同じ繪に幾月もかかつて克明にやつてゐるのは、私に言はせると、それは藝術家ではなくて、ただの骨折り屋ですな。そんな手合に天才があるとは信じられませんよ。天才は大膽神速にやつて退けます。——たとへば私にしても、」と、彼は何時もきまつて客の方へ向き直つて、『この肖像畫は二日で仕上げました。この顔は一日、これは二三時間、これなどは一時間あまりしかかかりませんでしたよ。いや……正直なところ私は、一本々々の線にこだわつてゐるやうなものを藝術とは認めませんよ。そんなものは職人仕事で、藝術ぢやありません。』こんな風に彼が客にむかつてまくし立てると、相手は只管この畫家の筆力と腕達者なところに感服し、數々の作がそんなに敏速に仕上げられたと聞いては、思はず驚嘆の叫びをあげさへしたが、あとではお互ひ同志こんなことを言ひ合ふのだつた。「あれは天才ですよ、正真正銘の天才ですよ！

御覽なさい、あの人の話しつぶりといひ、眼の光り方といひ！ *Il y a quelque chose d'extra-  
ordinaire dans toute sa figure* (顔を見ても、どこやら)』  
[非凡なところがある！]

自分のことがこんな風に噂されてゐるのを聞いては、畫家も悪い氣持はしなかつた。雑誌などに自分を褒めた記事が載つたりすると、それが自分の金で買収したものであることも忘れて、子供のやうに喜ぶのだつた。さうした記事の切抜きを到るところへ持ち廻つて、さも故意とらしくない様子をして、それを知人や朋友に見せびらかす、それがまた他所目には如何にも無邪氣に思はれるほど得意なのである。名聲はいよいよ高くなり、仕事や注文がますます殖える。しかし彼には、もうそろそろ、すつかり鼻に付てしまつた位置やポーズをつけて、千遍一律の肖像や顔を描くのが厭になつて來た。今はもう餘り氣乗りもせず筆をとり、どうにか首だけをざつと描きなぐると、あとは醫生にまかせて仕上げさせるのであつた。以前には、それでも何かと新味のあるポーズを考へたり、筆勢や仕上げの効果を狙つたりしたものである。それが今ではもう彼にはそんなことも面白くなかつた。案を練つたり、想を凝らしたりするには、心が疲れてしまつたのである。もうそんなことをする氣力もなければ、暇もなかつた。放縱な生活や、彼が花形にならうとして躍起になつてゐる社交界が、彼を勢作や思索から遠く引き離してしまつた。筆力も鈍れば情熱も冷めて、無意識の中に彼は千篇一律な、疾の昔に使ひふるされた、きまりきつた型

にはまつてしまつたのである。なるほど文官や武官の、どれも似たりよつたりの、冷やかな、いつも取り繕つた、謂はば他所ゆきの顔ばかり描いてゐたのでは、あまり筆の伸びる餘地はなく、いつしか壯麗な肉づけも感情の動きも情熱も忘れ果ててしまつた。まして布置結構や、藝術的な場景や、その高尚な端緒などに至つては言ふも愚かなことである。眼に觸れるのはいつも制服やコルセットや、燕尾服などといった、畫家が見たら冷然としてどんな空想も影をひそめてしまひさうなものばかりであつた。もはや彼の繪には、どんなありふれた繪にでもそれしきの妙所はあるといふほどの妙所も見あたらなかつたが、それでゐながら依然として聲價を落さず、世間に持てはやされた。尤も本當の批評家や畫家連は彼の最近の作を見ると、ただ肩をすくめるだけであつた。が、以前からチャルトコフを知つてゐた人々には、あんなに早くから萌芽を見せてゐた彼の天才が、どうして跡形もなく消え去てしまつたのか、それが頼と解らず、年配から言つても今が最も油の乗りきる筈の時期でありながら、どうして才能を失つてしまつたものかと、ほとほと推測に迷つたものである。

しかし、さうした風評も、有頂天に取りのぼせた彼の耳には入らなかつた。彼はもう、智慧分別にも年配にも不足のない時期に達してをり、身體も肥えて、横へますます擴がるばかりであつた。新聞や雑誌の上では(巨匠アンドレイ・ペトローギッチ)とか、(畫伯アンドレイ・ペトロー



ギッチンといふ風に、尊稱がつく。さまざまな名譽ある地位に推擧されたり、試験に臨席して欲しい、委員になつて貰ひたいなどと頼まれもする。相當の年配になれば誰でもさうであるやうに彼もそろそろラファエルその他の古代畫家の肩を怖ろしく持つやうになつたが、それも、古人の卓越した眞價を十二分に認識してのことではなく、ただ古人を引合に出して若い美術家たちをやりこめようがためであつた。又この年配の人の常として、青年と見れば例外なく、不道徳だの、精神的傾向が宜しくないだのと言つて非難する。又この世の中のことはずべて平俗な經路で行はれるもので、天來の靈感などといふものはある筈がなく、何事も一定の順序を踏んで、一律に几帳面にするのが肝腎であるなどと思ひこむやうになつた。つまり彼の境涯も今はもう、激しい憧憬をもつて息ついてゐた一切のものが畏縮してしまひ、力強い弓が僅かに心の琴線に觸れても、響き高い音となつてその胸に漲るには至らず、また美に接しても若々しい活力が焰となつて燃えもせず、ただ立ち消えになつた心は黄金の音にのみ惹かれ易く、その妙音にはつくづくと耳を傾けて、次第々々に、いつとはなく恍惚となつてしまふといふ——さういふ年配に達してゐたのである。榮譽といふものは、それを受けるに値せずして、ただ偷んだだけの者には何の樂しみともならず、それに値する者の心のみ不斷のときめきを與へるものである。それゆゑチャルトコフの心も今はただ黄金にのみ傾いた。黄金が彼の情熱とも、理想とも、怖れとも、歡びとも、目的

ともなつた。金櫃の中の紙幣束はどしどしと殖えて、この怖るべき贈り物を受ける宿命の者が等しくさうであるやうに、彼も黄金の他には何ものにも無關心で、何ものをも受け入れぬ、退屈さはまる人間となり、無闇に吝嗇な、何の目的もない守銭奴となつて、この冷酷な世間にはざらにあるが、生氣と情味に充ち溢れた人間の眼から見れば身の毛もよだち、心臓の代りに亡靈を胸に秘めた石の棺が徘徊してゐるかと思はれるやうな人間の類ひにならうとしてゐるのであつた。ところが或る出來事がふと彼の全生活を激しく揺ぶつて、心の眼を醒ませたのであつた。

或る日、彼のテーブルの上に一通の手紙が載つてゐた。それは美術學校から來たもので、このたび、伊太利で成功した露西亞の一畫家から新らしい作品を送つて來たについては、信頼すべき校友の一人として御來觀の上、意見を述べて頂きたいといふ招待狀であつた。その畫家はチャルトコフの昔の友達の一人で、子供の頃から美術に對する情熱を胸に抱き、困苦を厭はぬ燃えるやうな魂をもつて、その道に打ちこんでゐたが、やがて彼は友人や親兄弟を振り離し、捨て難い習慣をも打ち捨てて、羅馬へ——その美しい空の下には壯麗なる美術の園が生ひ茂り、その名を聞いただけでも多感な藝術家の胸全體がはげしく波立つ、あの素晴らしい羅馬へ修業に赴いた。ここでは、まるで世捨人のやうに仕事に没頭し、傍目もふらず一心に勉強した。この男にとつては自分の性質のことや、人に對する應對の下手なことや、體裁を構はぬことや、貧弱で野暮くさい

身なりをして藝術家の體面を汚すことなどに就いて、人が何と言はうが言ふまいが、一切頓著せず、仲間の者が自分に對して憤慨しようがしまいが、そんなことは一向平氣で、すべてを無視して、ひたぶるに藝道に精進したのであつた。倦まず撓まず美術館へ通つては、何時間も名畫の前に足を停めて、素晴らしい筆の跡を丹念に研究した。何か自分で描いても、幾度となくさうした偉大なる師匠たちに比べて己れを試し、名作の中から言葉なき雄辯な解答を讀み取るまでは、いづかな筆を置かなかつた。騒々しい會談や議論にも加はらず、清淨派ビュッパに與ましもせねば反對もせず各派を平等に見て、それぞれの長所だけを取つて尊重しながら、結局、自分の師と仰ぐのは畫聖ラファエルを指しては他にないと心に決めた。それは宛かも、大詩人がさまざまの魅力や壯嚴な美しさに満ちた種々の作品を讀破した上、結局ホーマーのイリアッドだけを座右の書として、この中にこそ求むるすべてのものが存在し、森羅萬象あらゆるものが深遠偉大なる完成の域にうつされてゐることを覺るのと同じである。その代り、この男は、特殊な修業に依つて創造の偉大なる觀念や、思想の力強い美や、天來の筆致の高貴な魅惑を會得したのである。

チャルトコフが大廣間へ入つて行つた時には、もう澤山の人の群が繪の前に集つてゐた。鑑識家がかう多數より集つた場合としては稀らしく、水を打つたやうな深い緘黙があたりを領してゐた。彼は早速、いかにも識者らしく、勿體ぶつた顔つきをして繪の前へ近づいて行つたが、ああ、

そこで彼の見たものは――

彼の眼の前には清淨無垢で處女のやうに美はしい、例の畫家の作品がかかつてゐた。その繪はいかにも約つましく、神々しく、邪氣やまひなく、天女のやうに素直に人々の上に掲げられてゐた。その神々しい畫像は多勢の人の眼に見つめられるので、羞かしさうに美しい睫毛を伏せてゐるやうに思はれる。識者たちは我れにもなく驚異の眼を瞪みりながら、つひぞ見たことのない新らしい筆法にじつと視線を凝らした。見たところ、そこには何もかもが具はつてゐる――ラファエルを研究した跡は構圖の上品なところにあらはれ、コルリッチを學んだ影は運筆の圓熟した點に窺はれる。が、何よりも目覺しく見えてゐるのは、畫家自身の魂にひそんでゐる創造力の現はれであつた。繪の中のどんな微細な點にも畫家の魂が浸透してをり、すべてに法則が守られ、内的な力が籠つてゐる。自然界に潜んでゐる柔らかな曲線が隨所に捉へてあるが、これは獨創的な畫家の眼にのみ見えるもので、單なる模寫しか出来ない畫家が手がけたら、角度にしてしまふところであらう。これは明らかに、すべて外界から抽き出して來たものを一先づ自分の心魂の中に取り入れて、それを改めて、或る調子の整つた莊重な詩うたとして魂の底から歌ひ出したものに違ひない。とにかくまことの創作と單なる自然の模寫との間には實に測り知れぬ懸隔のあることが凡俗の眼にもはつきりと解る。その繪にじつと眼まなこを凝らした時、期せずして一同を包んだ普通ならぬ靜けさは殆ん

ど名状し難いほどで——あたりは寂として物音ひとつしなかつた。しかもその間、くだんの繪は刻々と彌が上にも崇高さを増し、一切を超脱して玄妙不可思議なものとなり、果ては天來の靈感が藝術家の胸に實を結ぶ、あの一瞬の境と化してしまふのであつた。惟ふに人間の全生命もこの境地に達せんとする一過程に過ぎないのである。繪をとり圍んだ會衆の頬には危く涙の玉が傳はりさうであつた。如何なる趣味を持つ人も、どんなに粗野で邪よこしまな好みを抱ける人も、この神々しき作品の前では一つに融けあつて、聲なき讚美の歌を口ずさんでゐるかのやうであつた。

ぼかんと口をあけたまま身動きひとつせずチャルトコフは繪の前に立ちつくしたが、やがて來觀者や鑑識家たちが少しづつざわめき出して、この繪の眞價について論評をはじめ、彼にも意見を陳べて欲しいと懇請された時、初めて我れに返つた。そこで平然たるいつもの顔つきになつて、拗ねこびれた畫家らしく、如何にも差しさりのない、例へば（さうですなあ、勿論この作者の天分を否定することは出来ませんよ。どこか見どころがあつて、たしかに何か或る意味を表はさうとしたものには違ひないが、さて根本に遡つて見直すとどうも……）といったやうな意見を吐いて、それから、いつかう褒めたが褒めたにならないやうなことでも言はうと思つたのであるが、さてさう言はうとすると、言葉が口もとで消えてしまひ、返答の代りに涙がこみあげて來て、不覺にもわつと泣聲をあげると同時に、狂人のやうになつて彼は廣間を飛び出してしまつた。

暫しのあひだ彼は我が家の立派やかな畫室の眞中に立つたまま、身動きもせず茫然としてゐた。あたかも急に若がへつたやうに、消えてゐた才能の火花が再び閃めき初めたやうに、彼の全身全生命が一瞬にして覺醒したのである。彼の眼から急に目隠がとれたのである。ああ、青春の花の盛りを無残に滅ぼしてしまひ、我が胸にも燃えてゐて、今ごろは赫々たる光明を放つて、あの男と同じやうに感嘆と隨喜の涙を流させることが出来たかも知れぬ神火をば空しく消してしまつたのか！ すべてを何の惜しげもなく、無慈悲に滅ぼしてしまつたのか！ さう思ふと急に彼の心にも、嘗て身に覺えのある鬱勃たる功名心が蘇つたやうである。彼は矢庭に畫筆を擲んで畫布に近寄つた。顔には賦汗あせらあせがにじみ、その渾身は凝つて一念と化し、ひとつの腹案に燃え立つた。彼は地に墮ちた天使を描き出さうと考へたのである。この思ひつきは彼の現在の心境に最もよく當てはまつてゐた。けれど、悲しいかな！ その像も、ポーズも、布置も、結構も、畫布に載せると、いかにも不自然で支離滅裂なものになつてしまふ。筆致も想像力も最早ひとつの型にはまつて、その殼や、我れから身につけた桎梏を打ち破らうとしても、情熱の弱さが描寫の不確かさと誤謬を招くのみである。それといふのも一步步々々修練を積んで將來大成すべき下地を作るといふ長い退屈な階梯を無視したためである。無念は骨髓に徹する。そこで、最近に描いた生氣のない流行繪だの、驃騎兵や貴婦人や勅任官の肖像だのを残らず畫室から運び出させて、ひと

り自室に閉ぢこもり、誰をも部屋へ通させず、ひたすら制作に没頭した。忍耐つよい青年のやうに、晝學生のやうに、こつこつと仕事を進めたのであるが、その筆の先きから描きあがつて来るものは、いや、何とも情なく、腑甲斐ない出来ばえである。最も基本的な自然の要素を知らないうために、一筆々に運筆が澁り、實にくだらな機械的なことが氣勢をくじいて想像にとつての難關となる。いつの間にか筆が古くさい型にはまつて、手の組み方も例のとほりなら、首の据ゑ方にも新手は浮ばず、衣服の褶までが舊套に墮して、いつかな新らしい體の姿勢には乗らない。然も彼はそれに氣がついて、さう感じると同時にまざまざと自分の眼で見たのである！

（おれには本當に才能があつたのだらうか？）と、つひに彼は呟やいた。（自分でさう思ひこんでゐただけではなかつたらうか？）こんなことを言ひながら、以前に自分が描いた繪の傍へと近よつた。それはどれもこれも、あの寂しいワシリエフスキ島のみじめな荒ら屋で、世間を離れ、榮耀榮華を他所に見ながら、利慾の念のない清らかな心で描いたものばかりであつた。今その傍へ近寄つて、一々それを眺めにかかる、そぞろに昔の貧しい生活が彼の胸に蘇つて來た。（さうだ）と彼は絶望したやうに口走つた。（才能はあつたのだ！ どの繪にも、到るところにその兆しや跡形が見えてゐる……。）

不意にこの時、彼は全身をぶるぶる震はせながら立ち竦んでしまつた。じつとこちらを見張つ

てゐる眼にぶつかつたからである。それはシチューキン市場で買つた件んの異様な肖像畫であつた。これまではずつと他の繪の下になつてゐて眼につかなかつたので、すつかり忘れてしまつてゐたのである。ところが、ちやうど今しがた畫室に一杯になつてゐた流行繪や肖像畫を取り除かせたため、故意とのやうに、むかし描いた初期の作品と一緒に眼につくところへ出てゐたのである。この肖像畫の不思議な來歴を思ひ出し、自分が墮落した半面の理由がこの不思議な肖像畫にあつて、あんな奇妙なことで大金が手に入つたことから自分の心にさまざまな妄念が生まれて才能を滅ぼしてしまつたのだと思ふと——殆んど狂氣に近いものが彼の心に突きあげて來た。そこですぐさま彼はこの憎むべき肖像畫を取りのけさせてしまつた。しかし、さうしたからとて心の動亂は少しも鎮まらず、感情と五體とが底の底まで攪亂されて、今更のやうに彼は、才能もないのに分不相應なことをしようとして、しかもその出来ない場合に、驚ろくべき例外として時たま自然に生ずる、あの怖ろしい苦しさを知つたのである——その苦痛も、青春のころなら、却つて大成する切掛ともならうけれど、想像力の衰へ果てた人間にとつては甲斐なき焦慮を招くに過ぎない。——かういふ苦惱は得て人間を驅つて怖るべき悪行に誘ふものである。で、チャルトコフの胸は何とも言へぬ、物狂ほしいやうな嫉妬で一杯になつた。殊に作者の天分を具現した繪を見ると、忽ち癩癩の青筋が面に現はれて、ぎりぎり齒を食ひしげりながら、蛇のやうな眼つきで

それを睨みつけたものである。そんな時に人がよく懐く、凄まじい悪念が彼の心にむらむらと目を覺まして、狂氣のやうに彼はそれを實行に移さうとして必死になつた。やがて、これまで名畫として評判になつた繪といふ繪を、片つぱしから買ひあつめにかかつた。高い値段をはらつて買ひ入れた繪を、大切に自分の部屋へ持つてかへると、猛虎のやうな怖ろしい權幕でそれに躍りかかりざま、ひき裂き、ひきちぎり、ずたずたに寸断しては足で踏みにじりながら、さも心地よげにげらげらと笑ふのである。これまでに貯へた巨萬の富の力で、彼はこの淺ましい邪慾を飽くまで満足させることが出来た。彼はある限りの金囊の紐を解き、金櫃の蓋をあけた。これまで無知蒙昧な怪物が如何ほど多くの名畫を破壊したことがあつたとしても、到底この兇惡な復讐鬼には及びもつかなかつた。どこの競市でも彼が姿を現はすや否や、誰も目ぼしい美術品を手に入れることを諦らめてしまつた。恰かも天が怒つて、わざわざこの怖ろしい厄病神を降して、この世の調和を破らうとしたかの觀があつた。この怖ろしい慾念のためにチャルトコフも凄まじい形相となり、額にはいつも青筋が立つて、世を呪ひ、すべてを否定せんとする氣持は自づとその面持に現はれて来る。プーシキンによつて理想的に表現されたあの怖ろしい惡魔のこれが化身かとも思はれた。その口を突いて出るのは、毒舌でなければ呪咀の叫びであつた。街へ出れば、人々はまるで食人鬼にでも出會つたやうに怖れて、知己の者までが遠くから身をかはして、遭へば一日ち

ゆう氣色が悪いからとて、なるべく顔を合せぬやうにするのだつた。

だが、この世のためにも、美術のためにも幸ひなことに、このやうな無理やりに張りつめた生命が永くつづく筈はなかつた。人間の弱い命根に對して、これはまた餘りにも度はづれな、凄まじすぎる情念であつた。兇暴な亂心の發作は次第に、度數を増して、つひには怖ろしい病ひになつてしまつた。急性肺炎を伴つた激しい高熱にひどく痛めつけられたため、三日の後にはまるで亡靈のやうになつてしまつた。搗ててくはへて精神の錯亂はいよいよ不治の徵候を現はして來た。時としては數人の力でも取り抑へることが出来なかつた。そのうちに、もうずつと前に忘れてしまつてゐた例の奇怪な肖像の生々した兩眼が、またもや見えはじめた——その時のチャルトコフの暴れ狂ふ様は世にも怖ろしいものであつた。寢臺のぐるりにゐる者がどれもこれも彼には怖ろしい肖像畫に見えるのだ。彼の眼には肖像畫の數が二倍になり、四倍になり、壺といふ壁に無數の肖像畫がかかつて、例の生々した眼でじつとこちらを睨みつける。怖ろしい肖像は天井からも床からも顔を覗け、部屋が無限に廣くなり長くなるにつれて、屹とこちらを睨んだ眼はますますその數を増して行くばかりであつた。治療を引受けた醫者は、この患者の不思議な來歴に就いて一通りのことは聽いてゐたので、その夢枕に浮ぶ幻覺と彼の生涯の出來事との間に何か秘密の關係があるのではないかと懸命になつて探つて見たが、遂に何も解らなかつた。病人は苦しみ悶へ

るばかりで更に正體とはなく、物凄く喚き聲を立てて譯のわからぬことを口走るのみであつた。つひに斷末魔の苦しみが來ると、聲も立てずにそのまま息を引きとつてしまつた。その死骸は見るも怖ろしい形相を表はしてゐた。あれほど莫大な富も後には鏝一文残つてゐなかつたが、何百萬も投じたと思はれる數々の名畫がずたずたに引き裂かれてゐるのを見て、人々は初めてその怖ろしい使ひ途を知つたのである。

### 後 篇

箱馬車や、幌のあるのや幌のない輕馬車がとある家の支關先に夥しく停つてゐた。それはこの家でさる富裕な美術愛好家の所藏品が競賣にされてゐたからである。その昔の金持の美術通といへば花鳥風月の道に耽つて一生を甘い夢の中に過し、あれはメツェナートだといふ他愛ない評判をたてられて、それがためには先祖から受けついで莫大な遺産ばかりか、時には自分が營々として稼ぎためた巨萬の富をすら、惜氣もなく費ひ果してしまつたものである。さうしたメツェナートはいふまでもなく今では跡を絶つて、この十九世紀といふ奴は、紙に並べた數字だけで自分の財産を楽しんでゐる、あの銀行家の面を見るやうな、何の變哲もない世の中になつてしまつたのだ。

それはさて、その家の奥行の深い大廣間は、まるで野ざらしの死骸にたかる猛禽のやうに四方八方から駆けつけた種々雑多な會衆で埋めつくされてゐた。百軒店の露西亞商人から、青い獨逸風のフロックを著たがらくた市場の小商人までが、隊をなして押しかけてゐた。この手合の様子や顔つきもここでは、何處となくいつこくで、我儘らしく、自分の店先で客に應待する時の、あの露西亞商人の空々しい世辭愛想などは微塵も見せなかつた。ずるぶん上流社會の人達も來てゐたが、これが若し他の場所であつたなら、長靴につけて持つて來た埃りを頭で掃ふほど低いお辭儀をしかねない商人たちも、ここではいつかう無遠慮に振舞つてゐた。彼等はすつかり寛ろいで、遠慮なく書物や繪に手を觸れて品のよしあしを調べたり、何々伯爵といつた鑑識家連の競りあげた値段をさへ大膽に買ひ煽る。それに毎日、たとへ朝飯は抜きにしても必らずやつて來るといふ競賣市場の彌次馬も大勢まじつてゐる。また十二時から一時までは別に用のない體で、自分の所藏品をふやす機會を逃さないのを務めにしてゐるやうな上流の黒人筋も來てゐる。それから服裝も貧弱なら懷中もひどく淋しい癖に、毎日やつて來ては、欲得づくな目的があるでもなく、ただ競賣の成行を、誰が高くつけ誰が安くつけるか、誰が誰を買ひ遮り、何が誰の手に入るかなどといふことを見物してゐる殊勝な御仁もある。澤山の繪畫が雜然と取散らしてあり、家具や書物もごたませに置いてある。さうした書物には前の持主の名前の頭文字が組合はせてつけてはあ

れど、ひよつとすると一度も覗かれたことがないのかも知れない。支那製の壺だの、テーブル用の大理石の板だの、グリーフやスフィンクスや獅子の足などの曲線で裝飾した家具の、新しいのだの古いのだの、鍍金したのや鍍金をせぬシャンデリヤだの釣ランプだの——さういつたものが處狭く投げ出してある様子は店頭に陳べられたのとは大分趣きが違ふ。まるで諸々の藝術の混亂状態を表はしたやうな具合である。一體に競賣市といふものは見る眼もおぞましく、何となく葬列に似たところが感じられるものである。競賣の行はれる會所は、きまつて妙に陰氣なもので、家具や繪で積み塞げられた窓からは碌に明りもささず、申合せたやうに人々が口を噤んでゐる中で、袖で臺を叩きながら、不思議な因縁でこんなところへ落合つた哀れな美術品に引導をわたす競賣者のお経聲が聞えるなど、——見るもの聞くものが、妙に不愉快な印象を彌が上にも變りたてるものである。

競賣は今や酣と見え、人品賤しからぬ一團の人々がひとところへ塊まつて、何かしきりに競りあつてゐる。四方八方から（ルーブリ、ルーブリ）と言ふ呼聲が沸きおこつて、競賣者は一々その附け値を繰りかへしてゐる暇もなく、値段はもう初めの呼び値から見ると四倍にもなつてゐた。一塊まりになつた人々が躍起に競りあつてゐるのは一枚の肖像畫であつたが、それは多少でも繪のわかる者には見逃すことの出来ない代物で、まざまざと畫家の勝れた筆勢が現はれてゐた。そ

の肖像畫はもう何度も修理や手入れが施こされてゐるやうで、妙なゆつたりした着物をきた、異様な面相の、どうやら亞細亞人らしい、色の淺黒い男の姿が寫してあつたが、それを取りかこんだ人々は何よりもその眼の不思議な活力に駭ろかされた。見れば見るほど、こちらの腹の底まで見すかされさうな眼つきである。その奇怪なところと畫家の摩訶不思議な手際とが殆んど凡ての人々の注意を惹きつけた。ところが値段が法外に競りあがつて來たので、張りあつてゐた人々も大抵は手を退いてしまひ、後に残つたのは美術愛好者として有名な二人の貴族だけで、どちらもかうした掘出物は是が非でも手に入れずには措かぬといつた手合である。二人はもう夢中になつてしまひ、若しこのまま打ち捨てておいたなら、全く馬鹿々々しい値段に競りあげてしまつたことであらうが、丁度その時、傍で見えてゐた一人の紳士が突然、口を出した『どうか暫らくお待ち下さい。この肖像畫は他の何方よりもこの私に譲つて戴く権利があるやうに思ひますから。』

この言葉を聞くと、忽ちすべての人々はその紳士に注意を振り向けた。それは、年のころ三十四五六の、黒い長髪を縮らした、すらりとして恰好のいい男であつた。いかにも氣持のいい、暢然として朗らかな顔つきは、あらゆる惱ましい浮世の紛糾にはいつかう縁のなささうな氣持を現はしてをり、その服装にも何ら流行を追つた跡がなく、どちらから見ても藝術家のやうである。果してこれはBといふ畫家で、そこに居合せた人々の多くが個人的に知つてゐた。

『どうも、こんなことを申上げると大變奇妙に聞えるかも知れませんが、』と、一同の注意が自分に分集つたのを見て、彼は言葉をつづけた。『これには聊か仔細がありまして、それをお聴き下さいましたなら、成程もつともだと納得して戴けることと存じます。どう考へてもこの肖像畫は私の捜し求めてゐるものに違ひないのです。』

人々の顔には、いかにも自然な好奇心の色がうかび、競賣者も槌を振りあげたまま、口をあめぐりあけて聴耳をたてた。話のはじめにはちよいちよ肖像畫の方へ眼を向ける者も多かつたが話がだんだん面白くなるにつれて、一同はただ語り手の顔にじつと視線を凝らした。

『皆さんも御存じのやうに、當市内にはコロムナといふ區域があります。(と、畫家は語りはじめた。)あの邊は同じ彼得堡でありながら、他所とはまるでが違つて、都會ともつかず田舎ともつかず、一度あの街へ足を踏み入れると、若やいだ希望も情熱も忽ちどこかへ消えてしまふのが自分でもわかるやうな處です。あすこには未來といふものがなく、すべてが閑寂で、さながら隠居でもしたやうに逼塞して、何もかもが都會の活動の沈澱といつた形であります。この邊へ引越して來る人間と言へば、退職の官吏か、未亡人か、元老院の厄介になりながら、一生ここに埋れ木と覺悟をきめた貧しい人達か、一日ぢゆう市場をほつき廻つて小商人と無駄口を叩きながら、毎日、珈琲を五哥と砂糖を四哥だけ買ふことにきめてゐる炊事婦あがりの女たちか

さもなければ、一口に灰色の群とでも言つたらよささうな、天氣で言へば照りもせねば荒れもせずのどつちつかずで、一面に霧がかかつて、何を見てもはつきりせぬ、服装から、顔から、髪の手から、眼の色までがどんよりして灰色がかつた手合です。その他には戯になつた劇場案内人とか、退職九等官とか、片眼がとび出して、唇がやけに膨れあがつた、軍神マルスの子分のなれの果てなども數へることが出来ませう。かうした連中は全くの鈍感で、路を歩きながらも何ひとつ見向きもせず、何を考へるでもなく黙りこくつてゐます。部屋の中にも家財らしいものは大してなく、どうかすると生の露西亞ウオツカの角巖が一本くらゐあることもあつて、それを彼等は一  
日ぢゆう、ちびりちびりと舐めてはゐますが、いつかう頭へ酔も廻らず、あの、夜の十二時をすぎるといつも歩道を獨り占めにするメシチャンスカヤ街の(學生)ともいふべき若い獨逸の職人が好んでやるやうな豪勢な飲みつぷりとはてんで性質が違ひます。

『コロムナといふところの生活は、全く浮世ばなれがしてゐて、箱馬車などは滅多に見かけませんが、たまたま見かけるのには役者が乗つてゐて、ごろごろがたがたと、ひどい音を立ててこれだけが邊りの静けさを破つて行くのです。道を行くのは徒歩の人ばかりで、辻馬車も大抵は客を乗せず、鬚を生やした我が馬の飼秣を積んでとぼとぼとやつて行くぐらゐのもの。貸間も一ヶ月五留からのがあり、それもおまけに朝の珈琲まで附けて呉れる始末です。恩給を買つてゐ



る後家がこの邊での一番のお歴々で、身持もよく、部屋の掃除もきれいにして、友達とは牛肉やキャベツの高くなつた噂などしてゐる。さういふ後家の手許には、よく若い娘がゐて、中にはちよつと可愛いのもあるが、多くは無口で黙りこんでゐます。それから汚ない小犬と、振子の音も悲しげな柱時計がきまつて付きものです。後家に次いでいい身分なのは役者で、給金が給金だからこのコロムナを立ち退くことが出来ないのですが、享樂のために世を送る藝人の習ひで、ずゐぶん陽氣な連中です。彼等は寛衣のまま坐りこんで、ピストルの修繕をしたり、厚紙でいろいろな家事用の道具を拵らへたり、訪ねて来た友人と将棋をさしたり、骨牌を取つたりして午前中を過ごし、晩も矢張り似たりよつたりで、ただ時たまブンシュがつくだけのことです。かうしたコロムナ切つてのお歴々の外は全くコンマ以下の端下ばかりで、古い酢にわく蟲ほどもこつた返してゐますから、一々名前をあげたり、數へ立てたりすることはとても出来ません。お祈りをししてゐる婆さんもあるれば、飲んだくれてゐる婆さんもあり、お祈りと飲んだくれをちやんぽんにやつてゐる婆さんもあるれば、一體どうして露命をつないでゐるのか知らないが、兎に角十五哥にしようといふので襪襦や下着をカリンキン橋から古着市場まで、鑷のやうにえつちらおつちら運んでゆく婆さんもある——一口に言へば人生の最も悲惨な沈黙で、いかに慈善ずきな經濟學者にもこれだけは手の施こしやうがないのです。

「こんな連中を引合ひに出したのも、實はかうした人たちがほんの一時の急場を凌ぐために借金をしなければならぬやうな場合が時々あること、それがために、彼等の間には僅かばかりの金を貸すのに抵當を取つて高利を貪る特殊な高利貸が住んでゐるといふことを知つて頂きたいためののです。かういふけちな高利貸は大がかりな高利貸から見ると幾層倍も無慈悲なもので、それといふのも箱馬車で乗りつけるやうな人ばかりを相手にしてゐる大資本の高利貸などが見たこともない、貧乏で、明らさまに襪襦をさげた乞食のやうな連中の間に幅をきかせてゐるからです。そんな譯で、人間らしい氣持などは疾の昔に無くなつてしまつてゐるのでせう。かうした高利貸の一人で……尤もお断りしておかねばなりません、これからお話ししようと思ふ出来ごとは前世紀、つまり先帝エカテリーナ二世陛下の御代のことでありまして、その頃から見れば、御承知のとほり、コロムナの様子も、その生活むきも、今はよほど變つてゐるに違ひありません。ところで、さうした高利貸の中の一人に、もうずつと前から此處に居ついて、どの點から見ても實に不思議な人物があつたのです。いつもゆつたりした亞細亞風の衣服をつけてをり、その淺黒い顔の色は南國生れを物語つてゐるが、果して印度人なのか、希臘人なのか、それとも波斯人なのかその生國をはつきり言ひ當てることは誰にも出来ませんでした。並はづれて高い背丈と、淺黒い憔悴した、凄まじい顔つき、その何とも言ひやうのない怖ろしい色ざしと、異様な炯々たる眼光、

あくまで濃く、ふとい眉などから、この市のあらゆる他の灰色の有象無象とは際立つて違つてゐました。その住みからして、他の小さな木造家屋とは似ても似つかぬ、一頃ゼノアの商人が好んで建てたやうな石造家屋で、形も不規則なら大きさもまちまちな窓にはそれぞれ鐵の鎧扉と門がついてゐました。この高利貸が他の高利貸と違つてゐるのは、相手が乞食婆さんであらうが、無駄遣ひの好きな宮仕への顯官であらうが、相手構はず、幾らでも言ふだけの金を貸すことなのです。よく彼の家の前には素晴らしく立派な馬車が停つてゐて、その窓越しに社交界の豪華な貴婦人の頭が覗いてゐることがありました。例によつて世間の噂では、この高利貸の鐵の長持には數へきれないほど金や貴金屬やダイヤモンド等、金目の質物が一杯につまつてゐるが、この男は他の高利貸のやうな貪慾振りは見せない。金も氣前よく貸すし、返済の期限もごく都合のいいやうに切つてくれる。それでゐて、一種不思議な勘定で、この男の金は恐ろしく高利につく。と、まあ取沙汰されてゐたものです。ところが何より不思議なことで、多くの人々が怪訝に思つたのはこの男から金を借りた者がみんな變なことになつてしまふことで、どれもこれも不幸な最後をとげるのです。それが單に巷間の浮説か、取りとめもない迷信的な風評か、それとも故意と言ひ觸らされたデマか——その邊は駭とは解りません。が、その實例ともいふべき奇怪な出來事が、僅かの間一再ならず人々の面のあたりにまざまざと持ちあがつたのです。

『當時の上流社會に、衆目を一身に集めた名門の青年がりましたが、まだ若い頃から官界に名をうたはれ、眞に高尚なことなら何でも熱烈に尊敬し、人間の智能藝術の生んだものなら何でも擁護して、やがては一端のメツエナートとも言はれようといふ人物でありました。間もなく女帝陛下の御信任を辱うして、自身の望みにしつくり適つた顯職を授けられ、學術のためなり一般福祉のために大いに寄與することが出来るやうになりました。そこでこの若い顯官は畫家や、詩人や、學者などを身のまはりに集めました。彼はすべての人々に仕事を授け、鼓舞奨励したいといふところから、私財を抛つていろいろと有益な出版を企てたり、次々に仕事の註文をしたり奨學資金を出したり致しましたので、それがために多額の金を費消して、つひには手許がひどく不如意になりました。しかし、もとより飄揚な性質でしたから、途中で事業を放棄しようとは思はず、到るところで金融の途を求めて、遂には件んの高利貸を頼ることにしたのです。ところがその高利貸から相當の大金を借り出したと思ふと、間もなく、この人の様子ががらりと變つてしまひ、智能や才幹に秀でた者を虐げ苦しめるやうになりました。どんな文章を読んでも悪い方面ばかり見て、言葉の意味も曲解します。その頃ちやうど折あしく佛蘭西に革命が起つたのですが、端なくもこれが彼のあらゆる非行の武器になつたのです。それからといふものは、何を見ても妙に革命的な傾向のやうに思はれ、何につけてもその氣配があるやうに感じられたのです。で

いよいよ邪推ぶかくなつて、果ては自分で自身が疑はしくさへなり、いろんな怖ろしい讒誣を振りまいて多くの人に憂目を見せました。このやうな所業が、いつかは天聽に達せぬ筈はありません。畏くも女帝におかせられては甚く宸襟を惱ませ給ひ、實に一天萬乘の君にふさはしい仁慈の御心から仰せ下された諭言は一々今日まで傳はつてはをりませんけれど、その深い御趣旨のほどは多くの人の肝に銘じたと申します。女帝の仰せられるには、君主政體の下で人間の高尚な精神活動が抑壓されるべきではなく、學術や詩歌や藝術上の創作が輕視されたり、迫害を受けてはならない。それどころか、君主こそさうしたものの保護者で、シェークスピアやモリエールなどといふ類ひの人々も君主の寛仁な庇護の下に於てこそ時めいたけれど、一方、共和國に生を享けたダンテの如きは身の置き處にさへ困つた程である。眞の天才は君主の榮え、君主國の興隆した時に現はれるもので、政道の亂れた共和制度のテロリズムの下などには決して生れるものではない——そんな時代には一人として詩人らしい者が世に出た例しはない。ともあれ、詩人や畫家といふものは、人の魂に平和と美はしい静けさを宿らせこそすれ、騷擾や忿懣の種を抱かせるものではないから、特に優遇してやらなければならぬ。學者とか、詩人とか、藝術家といふものは王者の寶冠を飾る眞珠でありダイヤモンドであつて、これあればこそ偉大なる君主の御代に花も咲けば輝やきも彌増す道理である。と、かう仰せられましたが、かうしたお言葉を仰せ出された陛下

は、その時、誠に神々しくも御美はしく拜されたと申します。老人たちはこの物語をいたしなからいつも涙をこぼしたものです。で、この有難い聖旨に答へ奉るため、萬人が協力いたしました。何しろ、わが國民性の誇りと言つてもよいのは、露西亞人の胸には常に、虐げられた者の味方をするといふ、美しい心の宿つてゐることです。それはさて、陛下の御信任を裏切つた件ことの顯官は懲罰を蒙り、官位を褫がれました。が、それより一層辛辣な刑罰は世人の見る眼で、誰の顔にも萬人共通な思ひきつた侮蔑の色が浮んでゐます。虚榮に馴れた心がそのためにどれほど苦しんだか、それは言葉ではとても言ひ現はすことが出来ません。自尊心や、裏切られた名譽心、挫折した野望——さういつたものが一つに絡みあつて、怖ろしい狂風の發作の中で彼の生命は絶たれてしまひました。

『もう一つの見聞ましい實例も、人々が面のあたりに見た事實です。その頃この北方の都に美人も數ある中に、第一の佳人と稱へられた淑女が一人ありました。それは北國の美に南國の美をつきまぜたやうな妖嬈な麗はしさで、稀代のダイヤモンドにも類ふべき麗人でした。私の父なども、生涯にこれほどの美人は他に見たことがないと言つてをりました。富もあれば、才もあり、その上、心ばえも美しく、この婦人に缺けたものとは何一つありませんでした。それ故引く手あまたある中に、ひときは目立つたのはPといふ侯爵で、あらゆる青年のうち最も秀れた名門で

顔も美しければ、心も氣高く鷹揚な、どちらから見ても小説や婦人の理想になりさうな、<sup>グ</sup>ラン  
 ゼソンの人物でありました。この侯爵が熱烈に物狂はしいほどの戀慕を寄せてゐたのですが、美  
 人の方でも同じ燃えるやうな愛でそれに答へてをりました。けれど親達が不釣合な縁だと言つて  
 承知しないのです。それといふのも侯爵家の世襲財産はきつ疾づくに人手にわたり、家運が頓に  
 傾いて、生計の困難なことは隠れもない事實であつたからです。ところが、侯爵は不意に首都か  
 ら姿を消しました。何でも家政の整理に向いたとのことでしたが、僅かの間に怖ろしく立派に  
 なつて歸つて參りました。善美を盡した舞踊會や祝宴を催しますので、その噂は宮廷にまで傳は  
 りました。そこで件人の美人の父も急に好意を見せるやうになり、やがてこの都でセンセイシヨ  
 ナルな婚禮が擧げられることになつたのです。だが一體どうして花婿がかう急に一變して、途轍  
 もない金持になつたものか——確かなことは誰にも解りませんでした。しかし人の蔭口では、か  
 の不思議な高利貸と何やら契約を取り結んで借金をしたのだと言ひます。それはともあれ、この  
 結婚は都ぢゆうの評判になつて、花婿花嫁は一般の羨望的になりました。二人は永いあひだ互  
 ひに思ひ思はれた仲ではあり、何時に變らぬ熱烈情愛に結ばれて、それにどちらも徳の高い人柄  
 であることは凡ての人の知るところでありましたから、口性ない女達は、この若夫婦が天國へ生  
 れ變つたやうな楽しい月日を送るだらうなどと、岡焼き半分な取沙汰をいたしました。ところが

結果は全く豫想外で、一年ばかりの間に侯爵の心ががらりと變つてしまつたのです。疑ひ深い嫉  
 妬や、短氣や、限らない我儘の毒にあてられて、それまではあれほど氣高く上品であつた氣質も  
 どこへやら、妻を責めさいなむ暴君となり、全くかうも變るものかと思はれるほど、實に淺まし  
 い所業に訴へて、果ては打擲さへもする。それ故まだ一年とは絶たぬ間に、これがついこの頃ま  
 で多くの崇拜者を惹きつけたあの評判の女かと怪しまれるほどになつてしまひました。たうとう  
 もうこれ以上、その辛い運命を耐へ忍ぶことが出来なくなつて、女の方から離縁話を持ち出しま  
 したところ、それと聞いただけで侯爵は狂氣のやうに逆上して、赫となると同時に短刀を搦んで  
 妻の部屋へ躍りこみ、あはや二突きといふところを、やうやくその場に居合せた者が抱き止めた  
 始末でした。けれど逆上した侯爵は絶望のあまり、我れと我が刃に伏して、無殘な死態をしてし  
 まひました。

『この二つの實例は當時、世上で喧ましく評判されたものでありますが、尙この他にも、もつ  
 と下流の社會でいろいろなことが起つて、それがどれもこれも悲惨な結末を告げたと申します。  
 例へば、正直で眞面目な男が飲んだくれになつたとか、商家の番頭が主人の金を盗むやうになつ  
 たとか、年ごろ律氣にしてゐた殿者が僅かの金のために客を殺めたとか、いろんなことがあつた  
 のです。かういふ噂にはややもすれば尾鱗をつけて言ひふらされるもので、内氣なコロムナの

住民は自然と一種の怖れを抱くやうになり、あの高利貸はてつきり悪魔に違ひないと、もう誰ひとり疑ふ者もありませんでした。何でもあの男の持ち出す条件といふのは、身の毛もよだつやうな、他人にも言ひかねるほどのことだとか、あの男の金には物を焼き切る力があり、自然に焼けて赤くなるとか、不思議な印しがついてゐるとか——種々と取りとめもない噂がひろがつてゐたのです。ところで注目に値するのは、このコロムナの、貧しい老婆や、小役人、群小藝術家など、先刻もお話した有象無象の雑魚といった手合が言ひあはせたやうに、どんなに困つてもあの怖ろしい高利貸を頼るよりは寧ろ窮境に甘んじた方がましだと考へてゐたことで、身を殺しても魂は滅ぼすまいとて飢死をした老婆さへあります。その高利貸に街で出會つても、人々は思はずぞつとしたものです。道を歩いてゐた人はおつおつと後退りをして、それから後を振り返つて並はづれて背の高いその後姿が見えなくなるまでじつと見送つたもので、その様子を見ただけでも實に奇態なところがあつて、どうもあれは只ものでないと考へるのも無理からぬことでした。たうてい人間にはありさうもないほど深く刻まれたどぎつい顔の線や、青銅のやうな顔色、怖ろしく濃い眉毛、堪へ難く物凄しい眼差などは素より、例の亞細亞風の着物のだぶだぶした褶までが恰かもこの男の體内に蠢めてゐる情念に比べては、他の諸々の人間のいかなる情慾も物の數ではないことを物語つてゐるやうでありました。父なども、この男に出逢ふたびに、じつと立ちど

まつて、(悪魔だ！ まつたくの悪魔だ！)と、思はず口走らずにはゐられなかつたといふことです。ところで、この邊で私の父のことをちよつとお話しておかなければなりません。何しろ父はこの物語の主要人物なのですから。

『私の父は、どの點から見ても素晴らしい人物でした。なかなか滅多にはない畫家で、この露西亞の無盡藏な胎内からのみ輩出する稀世の傑物の一人でしたが、師にもつかず、學校にも學ばずして我れと我が魂の中に規矩法則を發見し、ひたぶるに我が藝の達成にのみ専念しながら、自分でも譯のわからぬ動機から、ただ我が心の示す道のみを進んだ獨學の藝術家で、世間からはともすれば(無學)といふ有難からぬ名を負はされるが、さうした誹謗にも、また自から招く失敗にもめげず、却つて新らしい發奮と努力を倍加して行くので、その精神に於ては忽ち無學といふ肩書をつけられた作品などからはずつと飛び離れた域に達してしまふといつた獨自の變物でありました。彼は眼に見えぬ秀れた本能の力で萬象の中にかくされてゐる意義を嗅ぎわけ、また(歴史畫)といふ言葉のまことの意味を自づから悟つて、何故にラファエルやレオナルド・ダ・ヴィンチやコルリッチなどの描いたあたりまへの顔や肖像が歴史畫と呼ばれ、他の畫家が題材を歴史にとつて、これこそ歴史畫だと一生懸命に主張してゐる大作が、やつぱり tableau de genre (普通)となつてしまふのか、その理由も會得しました。やがて父は内的な感情と自身の確乎たる

信念をもつて高貴なるが上にも高貴な、至高の藝術として、基督教を題材とした繪に筆を向けました。また畫家といへば大抵その氣質に名譽心や短氣が付きものになつてゐますが、父には更にさういつたところがありませんでした。氣概がしつかりしてゐて、正直で一本氣な性質で、幾ぶん粗野なところさへあり、肌合が荒くて、心には一種の矜恃を保ち、人の尊をするにも、謙遜でありませんながら、然も辛辣なことを言つて退ける人でありました。(他人のことはどうでもよい。)と、いつも父は言ふのでした。(わしは他人のために繪を描くのぢやない。客間の飾りにするやうな繪を描くのは御免だ。わしの氣持のわかる人なら有難いと思ふだらう。わからない者だつて、やはり神に祈るだらう。俗人に繪がわからないからとて、それを非難することはない。その代りある人は骨牌が上手で、いい酒や馬の目利も心得てゐる——それ以上、紳士方に何を知る必要があるのだ?) 却つて下手にあれやこれやと生嚙りをして惻口ぶられたら、それこそ堪つたものぢやない! 人にはそれぞれ本分があるから、めいめいそれを守つてゐたら澤山なのぢや。知りもしないのに知つたか振りをして、あたらしい興を醒まさせる人間よりは、知らないことは知らない。正直に言ふ人間の方がよつほど勝だと思ふ。) 父は僅かばかりの報酬で、つまり一家を支へ、自分の仕事をつづけるに足るだけの金を取つて繪を描いてをりました。のみならず、如何なる場合にも人を助けたり貧しい畫家に救援の手を差しのべることを拒まず、古人に對しても素朴

で敬虔な尊崇の念を寄せてゐましたが、そのせむか、父の描いた顔にはどんな目覺ましい天才でもたうてい眞似の出来ない氣高い表情が自づと現はれてをりました。つひには常住不斷の努力と自から定めた一筋道に據まず精進したお蔭で、自分を無學だの我流だのと嘖つた人々の側からさへも、尊敬を拂はれるやうになりました。絶えず教會から宗教畫を頼まれて、つひぞ仕事の切れ間もない有様。その中で殊に興味をそつた仕事が一つありました。どんな主題であつたか、それはよく憶えてゐませんが、何でもその繪には悪魔を表現しなければならなかつたのです。父はそれをどんな姿に寫したものと、長いあひだ思案に暮れましたが、どうかしてその顔に、人間を苦しめる、あらゆる重苦しいものを現はしたいと考へたのです。とつおいつ思案に耽つてゐると、時をり例の怪しい高利貸が頭に浮んで來ます。そこで父は(うん、さうだ、あいつをモデルにして悪魔を描いてやらう!)と、思はず横手を拍ちました。ところがどうでせう、或る日、父が自分の畫室で仕事をしてゐると、戸を叩く音がして、續いてづかづかと入つて來たのが、驚ろいたことには、例の怖ろしい高利貸ではありませんか。父は思はずぎよつとして、全身に冷水でも浴せられたやうに胸震ひを感じたと申します。

(お前さんは畫家かね?)と、高利貸は父に向つて無遠慮に言ひました。

(畫家です。)と、聊か狼狽しながら答へて、父は次ぎの言葉を待ちました。

「よし、ではわしの肖像を描いて呉れ。わしはもうこの先き長くはなささうだが、子供もない。けれど、どうもまるきり死んでしまひたくはない、何とかして生を残したいのだ。どうだ、お前さんには生身いきみそのままといふ肖像が描けるかね？」

「父は肚の中で（これあ、うまいぞ！ 奴は自分から進んで悪魔のモデルになりに来たのだ。）と考へました。そこで早速承知をし、期日や報酬のことも取りきめて、すぐその翌る日、父はパレットと畫筆を携へて先方へ出かけて行きました。棟の高い館で、犬が幾匹も飼つてあり、鐵の扉に鐵の門、アーチ型の窓、奇態な毛氈にくるんだ長櫃などがあつて、件くだの只者ならぬ主人が眼の前にじつと坐つてゐる——かうした總てのものが奇異な感じを起させます。窓は故意かぎとのやうにいろんなもので下部を遮られてゐたため、光線が上の方からだけさしこんでゐます。（ちえつ、素晴らしい光線が顔へ映してゐるぞ！）父はかう獨りごとを言つて、この絶好の光線を取り逃がしてなるものかと、夢中になつて描きにかかりました。（何といふ力のある顔だらう！）さう父は肚の中で繰り返しました。（このありのままを、半分でも寫し取ることが出来たなら、おれの描いた聖者や天使はすつかり食はれてしまふだらう。こいつと並べたら、みんな影が薄れてしまふだらうて。いや全く凄いだ！ 少しでも實物どほりに寫さうものなら、畫布から抜け出しかねないぞ。全く何といふ不思議な面相だらう！）父は絶えずかう繰り返しながら、ますます身

を入れて描いて行くと、どうやらその顔が畫布の上へ乗つて來たやうに思はれます。ところが、だんだん實物に近くなるにつれて、自分でも譯の解らぬ、何だか苦しいやうな、不安な氣持がつつて參ります。それでも父は一切頓着なく、顔の線や表情の、ちよつと人の氣つかぬやうなところまで、實物そつくりそつくりに寫し取らうと決心したのです。まづ何より先きに眼の仕上げにかかりました。ところがその眼に實に怖ろしい力があつて、實物そのままを寫し取るとは到底できさうもないやうに思はれます。しかし父は是か非でもその眼の極々こまかいところから、色合まで探り出して、その祕密ひみつを發はかすには措かぬと決心したのです……。ところが、いよいよ筆を執つて細部を書き込む段になると、妙に厭な氣持と、何とも譯の解らぬ苦しさがかみあげて來るので、餘儀なく筆を暫らく休めては、また取りかかるといふ有様でした。けれど、しまひにはどうしても我慢が出来なくなるのです。これは屹度その眼が肚の中まで喰ひ入つて得體の知れぬ恐怖を醸し出すのに違ひないと父は思ひました。二日目、三日目となるにつれて、それが一層はげしくなります。父はすつかり怖氣おそついて、しまひにはたうとう筆を投げ出して、もうこれ以上はとでも描くことが出来ない、きつぱり斷つたのです。それを聞くと、どうでせう、あの怖ろしい高利貸か加利ががらりと態度を變へてしまつたのです。彼は矢庭に父の足許に跪まつて、どうか肖像を描きあげてくれ、自分の運命も、現世に於ける存在も、偏へにこの繪の成否如何に關つてゐるのだ。

それにもう肝腎なところへ筆がついてゐるではないか。それさへ生き寫しに描きあげてくれたら自分の生命も超自然な力でその肖像に乗り移り、それによつてまるきり死んでしまはないでも済むことになるのだ。自分はどうしてもこの世に生き永らへてゐなければならぬのだからと、掻きくどいて頼むのです。父はそれを聞くとぞつとしました。いふ言葉がいかにも變で、不氣味に思はれましたので、畫筆もパレットも投げ出しておいて、一目散にその部屋を駆け出してしまひました。

『その日は一日ぢゆう、晝も夜もその一件が氣になつて堪りませんでした。その翌朝、高利貸にとつてはただ一人の召使であつた女が、件くだんの肖像畫を持つて來て、主人にはこの肖像畫はいらないさうですから、お返しします、その代りお禮も差上げられません、と言つて置いて行きました。その同じ日の晩に、父は高利貸が死んだこと、既にその宗旨に従つて葬式の準備が進められてゐるといふことを聞きました。父は、何ともいへぬ奇異の感に打たれました。それと共に、その頃から父の氣質が眼に見えて變つて來て、自分でも原因のわからぬ、何か落つきのない不安な心持になり、間もなく、この父がまさかと思はれるやうな行ひを平氣でして退けるやうになりました。その頃、父の弟子の一人で、少數の鑑識家や美術愛好家から作品に注意を向けられるやうになつた男がありました。かねて父もその男の才能を認めて、特別目をかけてやつてゐた

のでした。ところが、不圖この弟子に對して嫉妬を覺えるやうになつたのです。世間でいろいろとその男に關心を持つて評判をたてるのが堪らなく癪うざにさはります。擧句の果てに、近ごろ落成したさる立派な教會の壁畫をその男に描かせることになつたと聞いて、父は忌々いまくしさの絶頂に達しました。(何くそつ！ あんな青二才にのさばられて堪るものか！)と、父は言ひました。

(まだ、老人に赤恥を搔かせようたつて、ちと早すぎるぞ！ まだまだ、おれにだつて元氣があるわい。さあ、ひとつどちらがどちらに赤恥を搔かせるか見てゐやがれ！)そこで眞率で眞正直だつた人が、それまでは常に擯斥してゐた權謀術數を弄して、つひにその壁畫は競作ケンサクに附するか一般畫家も應募することが出来るといふ聲明を出させて、自分はそのまゝ自宅に閉ぢこもつて一心不亂に筆を揮ひはじめました。父はこの繪に全力を傾倒して、己が魂をそれに打ち込まうとしたもののやうです。果して出來あがつたところを見ると、これまでに描いたものの中でも傑作のやうに思はれました。これこそ入選第一の作であらうとは、誰ひとり疑ふものもありませんでした。いよいよ繪が陳列されて見ると、なるほど他の繪とはまるで雲泥の差があります。するとふと立會人の一人で、唳うか僧侶であつたと思ひますが、こんな批評をして人々を驚ろかせました。(なる程、この繪には豊かな才能が現はれてゐる、けれど顔に聖ホトかささがなくて、却つて眼の中に何やら魔性の影がさしてゐる。どうも畫家が不純な感情に操られてこの繪を描いたものらしい。)



さう言はれて人々は繪を見直しましたが、成程その言葉の正しいことに間違ひありません。父もその不面目な批評が果して當つてゐるかどうかを自から確めようと思つたらしく、つかつかと自分の繪の前へ進みよりましたが、殆んど畫中の人物といふ人物に例の高利貸の眼が描きこまれてゐるのを見てぞつとしました。それらの眼がどれもこれも悪魔のやうに破壊的な眼差でじつとこちらを睨んでゐるので、思はず父は身震ひをしました。その繪は落選ときまり、かの弟子の繪が一等に入選したと聞いた時の父の忌々しさは、とても筆紙に盡し難いものがありました。家へ歸つて來たをりの物狂はしい様子も、とても口では述べられません。殆んど母を打擲しないばかりで、子供たちを追ひ拂ひ、畫筆や畫架をへし折つて、件の高利貸の肖像畫を壁から取り外すなり、ナイフを持つて來い、暖爐を焚きつけろと呷ひつはしましたが、それを切りこまざいて火にくべてしまふつもりだつたのです。と、丁度その時、折よく訪ねて來た友人が部屋へ入つて參りました。それも矢張り畫家でしたが、樂天家で、いつも分に安んじて、つひぞ法外な野心などは起したことがなく、どんな仕事でも機嫌よくするが、飲んだり食つたりする段になると一層機嫌がよくなるといつた人物でした。

「何をしてゐるんだい？ 何か燃さうとしてるぢやないか？」さう言ひながら肖像畫の傍へ近よつて、「飛んでもない、これは君の傑作の一つぢやないか。このあひだ死んだ高利貸だらう？」

素晴らしい出來だ。なるほど圖星だねえ、然も狙ひどころが眼と來てゐる。どうして、なかなかこんな眼つきつてものは、ざらにはあるもんぢやないて。」

「火にくべたらどんな眼つきをするか、ひとつ試してやるんだ！」さう言つて父は今にも肖像畫を暖爐の中へ投げこまうとします。

「おい、待つてくれ！」と、友人は父の腕を抑へながら言ひました。「そんなに目障りになるのなら、いつそ僕にくれ給へな。」初めのうちは父も強情を張つてゐましたが、それでもつひに納得しましたので、樂天家はまんまと肖像畫をせしめたことを甚く喜びながら、それを持つて歸りました。

「友人が歸つて行くとき父の心は樂になりました。まるで肖像畫といつしよに心の重荷がとれたやうな氣がするのです。そして我れながらどうしてあんなに心が拗くれて、嫉妬が起つたり、氣質ががらりと變つたのだらうと怪しまれるのでした。自分の所業を省みると、いかにも情けなくなつて、心から悲しげに呟やくのでした。「いや、これはてつきり神罰に違ひない。おれの繪が辱めを受けたのも尤もなことだ。もともとあれは、人に鼻をあかせようと思つて描いたのだからなあ。妬ましいといふ悪魔のやうな心で筆をとつたのだから、繪にその淺ましい氣持の出るのは當り前のことだ。」父は早速、以前の弟子を訪ねて、掻き抱いて赦しを乞ひ、出来るだけ罪の

償ひをしようと努めました。それから再び前々どほり落ちついて仕事に精進しましたが、どこか冥想的な様子を時々その顔に浮べるやうになりました。よく祈りはするが、ともすれば黙々としてゐることが多く、他人の噂をしてもあんまり辛辣なことは言はなくなつて、一見荒々しかつた肌合も何となく圓くなつて参りました。ところが程なく或る事情に直面して、一層つよく心を動かされました。と申しますのは、かの肖像畫を持つて歸つた友人に久しく會ひませんので、父が訪ねて行かうとしてゐると、そこへ思ひがけなく先方から突然やつて來たのです。双方から一言二言の問答があつてから、友はこんなことを言ふのです。(ところで、君がこの間あの肖像畫を焼き棄てようとしたのは、なるほど尤もだねえ。いや、全くあの繪には氣味の悪いところがあつたよ……僕は魔女の存在なんぞ信じない方だが、どうもあの繪には魔がさしてゐるよ……。)

(どうして?)と、父が訊ねました。

(かうなんだよ、あの繪を持つて歸つて部屋に掛けるとね、どうもそれからといふものは何だか厭な氣持がして……まるで誰か人を殺さうとでもしてゐるやうな氣がするんだよ。これまでつひぞ不眠症なんてことは知らなかつたが、不眠症どころぢやない、實に變な夢にうなされるんだ……いや、夢か、それとも何か別なものか、自分でもはつきり解らないんだが、まるで家妖ケマキにでも魔マジはれたやうな氣持がして、あの不氣味な老人が、しよつちゆう眼前ガンバシにちらつくんだよ。兎に

角その心持はちよつと説明が出来ないわえ。こんな目に逢つたのは生まれて初めてだよ。この頃うちはずつと、まるで氣でも狂つたやうにぶらぶらしてゐたが、妙に不安で、何か事が起りさうな厭な氣持がしてならなかつたんだよ。誰に向つても心から愉快な、打ちとけた口が利けなくつて、何だかまるで探偵にでも傍についてゐられるやうな氣持なのさ。ところが、甥の奴がああ繪を欲しいと言ふから、やつてしまつたんだ。すると急に、肩から重石でもおろしたやうにほつとして、この通り遽かに氣分が晴れ晴れして來たんだ。いや、まったく君はえらい悪魔をでつちあげたものさ!)

『この話の間ぢゆう、父は一心に耳を傾けてをりましたが、やがてかう訊ねました。(それで今は今、あの肖像畫は君の甥の手許にあるんだね?)』

(ところがどうして! 甥の奴だつて堪るもんか!)と、その樂天家が言ひました。(どうも

あの繪には高利貸の魂が乗り移つてゐるんだねえ。額縁から抜け出して部屋の中を歩きまはるだの何だのと、甥の奴めどうも頓トと合點のいかぬことを言ひをるのさ。僕も自分の身に經驗ケンギがなかつたら、てつきりこいつは氣が狂つたのだと思つたらうよ。甥の奴は何とかいふ繪を蒐めてゐる男に賣り渡したさうだが、その男も持ちきれなくつて、また誰かに譲つてしまつたさうだ。)

『この一件は父の心に強い感銘を齎トりました。それから眞劍に考へこんで、氣鬱症のやう

になつてをりましたが、たうとうしまひには、自分の筆が悪魔の道具に使はれて、本當にあの高利貸の生命いのちがどうかして幾分でも肖像畫に乗り移つたればこそ、かうして今、人に淺ましい心を起させたり、畫家を邪道に陥れたり、怖ろしい嫉妬の苦しみを舐めさせるなど、いろいろと世間を騒がすのだと思ひこみました。その矢先へ不幸が三度も重なつて、妻と娘と頑是ない男の子とを急に亡くしたので、父はこれを天罰だと思つて、是が非でも浮世を捨てようと決心いたしました。それで私が十歳になるのを待つて美術學校へ入れ、負債の後始末などをつけてから、人里離れた或る僧院へ遁れて、間もなくそこで僧籍に入つてしまひました。出家の後は嚴正に身を持ち怠りなくすべての戒行を守つて同宿の衆僧を驚ろかせました。そのうち僧院長が父の繪に巧みなことを聞き知つて禮拜堂の大聖像を描くやうにと求めました。しかし今はつつましやかな沙門の身となつてゐた父は、いや自分とはとてもその任ではない、自分の筆は汚れてゐるから、そのやうな御用が務められる身となるためには、先づ第一に精進と難行苦行によつて魂を洗ひ淨めなければならぬと言つて、固く斷りました。それでも強つてとの言葉ではありませんでした。そこで父は自分から進んで思ひきり僧院での戒行を嚴しくいたしました。けれど後には、それでもまだ不十分で、苦しみが足りなく思はれて參りました。それで父は僧院長の許しを得て、今度には全く孤獨の生活をするために曠野へ身を避けました。ここでは樹の枝を集めてささやかな草庵

を結び、生のままの草の根などで餓ゑをしのぎながら、重い石を背負つて一つの場所から他の場所へ運んだり、日の出から日没まで同じ場所に突つ立つて、手を上へあげたまま絶えず祈禱を唱へるなど、あらゆる難行苦行を求めて、聖者の言行を他にしては類例のない、想像も及ばぬ捨身禁慾の行を積んだもののやうでした。父はこのやうにして何年といふ久しい間、祈禱の功德で力をつけながら、その肉體を苦しめてをりましたが、やがてある日のこと、僧院へ戻つて來て、僧院長にきつぱりとかう申しました。(今こそ用意がととのひました、神の御心に適ふことならばいつぞやの聖像を描きあげませう。)そこで畫題をキリストの降誕と定めて、まる一年といふものは庵室から一步も外へ出ることもなく、粗末な食物で辛うじて身を養ひながら、絶えず祈禱を唱へつつ、その仕事に没頭いたしました。一年たつて聖像は完成しましたが、それは誠に見事な出來ばえでした。なるほど僧院長も同宿の僧たちも、繪畫の道には餘り精通してをりませんでしたけれど、一同は畫中の人物の並々ならぬ神々しさに打たれてしまひました。俯むき加減に童子を見守られる聖母の神々しくも柔しい面差、もう何處か遠くを見通してゐられるらしい神の童子のいと賢しげな眼差、神樂の不思議に打たれて童子の足許に平伏した諸王の崇嚴な沈黙、さては畫面全體に漲り渡つた、言ふに言はれぬ聖かい靜寂——かうした總てが、いかにも調和のいい力強くどつしりした美しさの中に表現されてゐて、見る眼に蠱惑的な感銘を與へます。僧侶たちが

等しくこの新らしい聖像の前に跪くと、感動した僧院長はかう言ひました。(「いやいや、人間の藝術だけでこんな繪が描ける筈はない。聖ホトかくも尊い神意がそなたの筆を動かして、天來の祝福がこの繪に宿つたのに違ひない。)

『丁度その頃わたしは、美術學校の全課程を卒へて金牌を授與されると同時に、二十代の畫家にとつては最大の夢想である伊太利へ留學せしめられるといふ嬉しい希望を達する身になつたのです。で、出發に先だつて、別れてから十二年にもなる父に暇乞をしに参りました。實を言へば父の面影はとづくに忘れてしまつてゐたのですが、その嚴やかな精進潔齋の生活ぶりは風の便りで聞き知つてをりましたから、會はぬ前から、定めて庵室と祈禱の他はいつさい世間と没交渉で絶え間なき斷食と不眠に疲れ果てた寒岩枯木のやうな隱者の姿を見ることがと想つてゐたのです。ところが、眼の前に現はれた神々しくさへ思はれる優しい老僧を見て、私はどんなに驚ろいたこととせう！ その顔には艱苦の跡方さへ認められず、天來の悦びに晴々と輝やかわたつてゐるのです。雪のやうに白い髯と、これも同じく銀色の、細くてやんわりした髪の毛が、繪に描いたやうに胸に垂れ、黒い法衣の襷を蔽つて、その質素な衣の上から締めてゐる紐にまでとどいてをります。けれど何より私に意外であつたのは、父の口から聞いた美術についての意見やその言葉で、私はそれを永く心に銘じて忘れないつもりですが、廣く同じ道にいそしむ人々にも矢張り

さうあつて頂きたいと切望する次第であります。

『父は、私が祝福を受けるために傍へ近寄つた時かう言ひました。(「伴や、わしはお前を待つてゐたのだ。お前もこれで、いよいよ生活の道が開けたといふものだ。お前の進んでゆく道は淨らかな道だ——それを踏みはづさないやうにしてくれ。お前には才能がある。才能は何より尊い神の賜物だ——それを滅ぼさないやうに。何を見ても、よくよく研究して、すべてのものを我が筆で征服しなければならぬが、すべて物の内に潜む想を見出すやうにして、何より先づ創造の神祕を會得するやうに努めることだ。神に選ばれて創造の祕密を會得した人ほど幸福な者はない。さういふ人には最早この自然界に何ひとつ賤しい對象がなくなる。眞に創作の才ある美術家はどんなささやかな物を取扱つても、偉大なものを手がけた時と同じやうに、矢張り大きいところがある。さういふ人が描くと賤しい物も賤しいところなくなる、それは作者の美しい魂が自然とその中に滲み出て来るからである。賤しい物が高貴な表現となるのは、それが作者の心の煉獄を通つて来るからである……。神々しい天上の樂園の啓示を人間が見て取るのは、ひとり藝術を介してのみであるから、それだけでも藝術は他のものより尊いわけだ。それ故、嚴やかな靜寂の境地が浮世の離離たる生活より如何ばかり勝れ、創造が破壊より如何ばかり貴く、また天使がその朗らかな心の純潔で穢れのないところだけでも、惡魔の絶倫な精力や、擅まな情慾より如何にか

りか崇高いやうな、高尚な美術の創作は、この世にありとあらゆる他の物より如何ばかり貴いかわれんのぢや。だからすべてを藝術に捧げ、情熱の限りを盡して美術に打ちこむがよい——情熱と言つても俗念をもつて息づいてゐるやうなものではなく、穢やかな天來の情熱でなければ駄目だ。それがなくては人間は俗世を超越することも出来ず、人心を安んずる妙音を吐露することも出来ぬ。萬人の心を安めるため和らげるためにこそ、高尚な藝術的作品は世に現はれるのである。それ故、人の魂に不平を齎らす筈はなく、朗々たる祈りの聲となつて常に神の御許へ近づかうとする勢を持つてゐる。だが、時には無明の闇が来る……さう言つて父はふと口を噤みましたが、そのとき父の顔は一瞬間、雲がかかつたやうに、今まで晴々してゐたのが急に暗くなりました。(わしの生涯にもさういふ時があつた。)と父は言葉をつづけました。(わしが肖像を描いたあの不思議な男はいつたい何者だつたのか、今だに解らない。正しく何か魔性の者であらうが、世間では悪魔の存在を認めないから、あの男のことについては何も言ふまい。ただあれは、わしが厭々ながら描いたものだといふことだけ断つておく。あの時わしは少しも仕事に愛着を感じなかつた。無理やり自己を抑へて、私心を去り、すべてを殺して、ひたすら自然のままを忠實に再現しようと思つたのだ。だからあれは藝術としての創作ではなかつた。藝術でないから、あれを見て人の抱く感情も穢やかならぬ、物騒なもので、藝術家の持つ感覺ではない。藝術家といふもの

は騒然たる不安の中にあつても平靜を失はぬものだからなあ。何でもあの肖像畫は人手から人手へと渡つて、至るところで惱ましい印象を巻き起して、藝術家の心に妬みや、仲間同志の暗闘や他人を苦しめさいなまうといふ悪念などを生みつけてゐることだ。どうかお前だけにはそのやうな浅ましい心を起させたくないものだ！ さういふ僻みどころより怖ろしいものはない。一人でも誰か他人に迫害を加へる位なら、いつそ他人から迫害を蒙つてあらゆる憂目を耐へ忍んだ方がましだ。わが魂の純潔だけは守つてくれ！ 天才を恵まれた者は、人一倍その魂を純潔に保たなければならぬ。凡人なら大目に見て貰へることも随分あるが、天才のある者はさうはいかん。晴れがましい禮服をつけて家を出た人が、ほんの一滴でも車輪の泥をつけてゐるよつものなら、おほい人がたかつて、指をさしながら、そのだらしなさをかれこれと言ふけれど、他の不斷着をきて通る人が如何ほど泥にまみれてゐても、誰ひとりそれを氣に懸けるものはない。不斷着は汚れが目立たないからだ。)

『父は私を祝福して、抱きしめました。私は生涯にこの時ほど、氣高い感動を覺えたことはありません。親に對する子供の感情といふよりは、遙かに敬虔な心をもつて、私は父の胸にひと身を寄せて、垂れさがつてゐる銀髪に接吻しました。』

『父の眼には、きらりと涙が光りました。(倅や、わしはお前に頼みがある。』と、父はもつ

いよいよ別れる時になつて、かう言ひました。(若しかすると、先刻わしが話したあの肖像畫をお前が何處かで見かけるかも知れんが——不思議な眼つきと人間らしくない面相とで直ぐにそれと解るから——若し見つけたら、何は措いてもそれを裂き棄ててくれ……。)

『かう言はれて見れば私も、誓つてそれを引き受けましたと言はずにはゐられないぢやありませんか。ところが、それからまる十五年といふ月日の間に、私は父が描いたといふその肖像畫に少しでも似たところのある繪には、つひぞ廻り會つたことがないので。それが、今ふいにこの競賣で……。』

さう言ひかけて畫家は、もう一度かの肖像畫を見ようとして壁の方へ眼をやつた。と、それまで話に聴き入つてゐた人々もその刹那やはり同じやうに首を振りむけて、その不思議な肖像畫を眼で搜した。ところが意外なこともあるもので、その時にはもう肖像畫は壁にかかつてゐなかつた。がやがやいふ聲と身動きの音が群集の間に行きわたると、それについて『盗まれたんだ』といふ聲がはつきり聞えた。人々が話に聴きとれてゐる隙に、何者かがうまうまと掻つばらつて行つたのであらう。そこに居あはせた人々も、實際あの不思議な眼を見たのであらうか、それともあんまり長いあひだ、古ぼけた繪ばかり見てゐたために眼の心が疲れて、ちよつとそんなものが見えたやうな錯覺を起したのではなからうかなと思ひ惑つて、その後久しいあひだ、有耶無耶

で過したといふことである。

馬  
車

Bといふ小都會は、×××騎兵聯隊がそこに駐屯するやうになつてから、すつかり賑やかになつたが、それまでといふものは恐ろしく退屈な町であつた。よくこの町を通りすがりに、建ちの低い、ペンキ塗りの、まるで本當とは思へないほどしんねりむつりとして往還を眺めてゐる家並に、ふと眼をとめるとその刹那、實に何とも言ひやうのない變な氣持になつたものである。例へば賭けごとで洗ひざらひすつてしまつたとか、間が悪くて飛んだへまをしてのけた時の氣鬱とでも言はうか、——要するにどつとしない氣持である。家々の壁土は雨のために處剝して、白壁が白い色の代りにまだらになつてゐた。屋根は大部分、われわれ南部の町では普通の、草葺きであつた。風致を害ふといつて小公園も、もつと前に市長の命令で伐り拂はれてしまつてゐた。街りでは人つ子ひとり見かけることもなく、たまさか雄鶏が舗石道を横切つて行くぐらゐなものであるが、そのまた舗石道といふ奴が五六寸からの厚みに積つてゐようといふ埃りのために、まるで羽根枕のやうにふわふわしてゐて、それがちよつと雨でも降らうものなら、忽ち泥濘に變る、さうするとこのB市の街りは、ここの市長が佛蘭西ッ兒と呼んでゐる、例の丸々ふとつた動物で一杯になるのである。彼等とはぼけたやうなその鼻面をにゆつとばかりにその結構な浴槽から突き出すなり、ゲーゲーと變てこな啼き聲を立てるので、馬車を驅つて通りかかつた人などは、た



だもつ、馬に鞭をくれて追ひ立てるより他に手はないのである。とはいへ、馬車などに乗つて通る人をこのB市で見かけるやうなことは滅多になかつた。けれど稀に、ごく稀に、十一人ほどの農奴を持つた何處かの地主が、南京織のフロックを着こみ、半ば乗用車らしく半ば荷馬車らしいものに乗つて舗石道をガラガラやつて行くやうなこともあつた。彼は積みこんだ麥粉の囊の蔭から顔をのぞけて、栗毛の牝馬に軽く鞭をくれるが、親馬の後ろからは仔馬がびよこびよこつて行かうといつた鹽梅である。市の立つ廣場からして何處となくうらぶれた光景を呈してゐる。仕立屋の家が一軒つき出てゐるが、それもひどく妙ちくりんに、間口全體ではなく、斜に角だけが出しやばつてゐるのである。それと向ひあつて、窓の二つある石造の建物が、もう十五年も前から建ちかかつてゐる。その先きは泥いろに近い灰いろの塗料をぬつた、どうやらそれだけは當世風な板塀になつてゐるが、これは他の建物に範を示すため、市長がその若盛りにつまり、まだ彼が午飯のすぐ後で一寝入りしたり、夜ふん起き出して来て乾スグリで味をつけた一種の煎薬なんぞ傾ける習慣をつけてゐなかつたころ拵らへたものである。その他の場所では大抵、みな籬になつてゐる。廣場の中央には、極く小つぽけな小店が竝んでゐる。そこには何時も、珠數つなぎにした輪麵麩だの、赤い頭巾をかぶつた百姓女だの、四五貫目もの石鹼だの、若干ポンドの苦扁桃だの、獵銃の散弾だの、半麻の布だの、それから始終扉口のところで釘投戲に打ち與じてゐる

二人の番頭だのを見かけることが出来たものだ。ところが、この郡の首都たるB市に騎兵聯隊がおかれるやうになると、その様子ががらりと變つてしまつた。街りは急に賑やかになり、活氣づいて、一口にいへばすつかり見ちがへるやうになつてしまつたのである。——低い小さな家々は自分の傍を通りすぎて行く、頭に羽飾りつきの帽子をかぶつた、きびきびして、風彩の堂々たる士官の姿を度々見かけるやうになつた。その士官は仲間のところへ昇進の話だの、素晴らしい煙草の話だのをしに、時にはまた、彈機つきの乗用車を賭けて骨牌をしに行くのである。で、その馬車は聯隊用と呼んでも差しつかへなかつた。と言ふのは、つひぞそれが聯隊から離れることなく、みんなのところを堂々めぐりをしてゐたからである。例へば、今日それを少佐が乗り廻してゐるかと思ふと、明日はそれが中尉のところの厩舎に姿を現はしてゐる。かと思ふと、一週間の後には、どうだらう、又しても少佐の從卒がそれに油を塗つてゐるといつた鹽梅なのだ。家と家との間の木柵の頭には、ところきらはず、兵隊帽がずらりと日向にかけられてをり、灰いろの外套が必らず門口の何處かにゆつと突き出てゐる。横町では、まるで靴刷毛みたいな剛い口髭を立てた兵隊たちによく出會したものである。さうした口髭は到るところで目についた。柄杓を持つた町家の女房どもが市場に集まれば——屹度その肩越しに、例の口髭が顔をのぞけてゐる。で、それまでは、さる補祭の妻だつた女と一つ家に同棲してゐる判事と、思慮分別のある人物ではあ

るが、まる一日ぢゆう——つまり、晝飯から晩まで、晩から晝飯まで徹底的に寝てばかりゐる市長とだけが構成してゐた社交界は士官連によつて急に活氣づいたが、そこへ少將補の官舎が移されるに及んで更に人數を増して一際おもしろくなつて來たのである。それまでは誰ひとりその存在についてすら思ひを及ぼさなかつた界限の地主連までが、繁々とこの郡の首都を指して乗りこんで來るやうになつた。それは士官諸氏に面接したり、時には「銀行」の一勝負もやるのが目的であつたが、この賭事もう、種播きのことやら、妻君から呷ひつかつた用事やら、兎狩のことやらで一杯になつてゐる彼等の頭を惱ましくもぼうつとさせてしまつてゐたものである。それはさて、甚だ残念ながら一體どういふ事情から少將補が大午餐會を催すことになつたのであつたか、それは今ちよつと思ひ出されなけれど、兎に角そのための準備がまた大したものであつた。將軍邸の厨房で料理番たちの振ふ庖丁のちあふ音が、もう市の關門ちかくまで聞えたほどであつた。また市場の品物は一切合財その午餐會のために買ひ占められてしまつたので、判事は例の補祭の後家といつしよに、僅かに蕎麥粉の薄焼と、葛粉のキッ<sup>\*</sup>セリより他に食へることが出來なかつた。さて、將軍の家のさして廣くもない前庭にはぎつしりと四輪馬車や幌附馬車が處狭く立ちならんだ。會衆は男子ばかりで——士官連に、近在の地主たちの或るものから成り立つてゐた。地主連のうちで誰より衆目を惹いたのは、B——郡下の主だつた貴族の一人であり、選舉界に於

いて最も呼び聲の高かつたピファゴール・ピファゴールギッチ・チエルトクーツキイで、いつも粹を癡らした馬車でここへやつて來る男であつた。彼は前に、さる騎兵聯隊に勤めてゐて、最も重要、且つ著名な士官の一人であつた。渺くとも所屬の聯隊が駐屯したほどの土地に於ては、いゝろんな舞踊會の席で、いつも彼の姿が見かけられたのである。だが、さうしたことについては寧ろタンボフ縣やシンビルスク縣下の娘たちに訊ねてみた方がいい。ところで彼が、若し普通に「不快な事件」と呼ばれるところの、或る出來事のために勤めを退いてしまふやうなことにさへならなかつたならば、てつきり彼は他の諸縣下に於てもやはり自分自身にとつて有利な名聲を擡めたことに違ひない。が、その昔、彼が誰かに平手打をお見舞ひ申したのだつたか、それとも彼の方でそれを頂戴したのだつたか、その邊のことは今はつきり憶えてゐないが、兎に角、そんなやうなことから彼が退官を餘儀なくされたことだけは事實である。とはいへ、それに依つて彼は何ら自己の威信を貶すやうなことはなかつた。軍服式に腰の高い燕尾服を身にまとひ、長靴には拍車をつけ、鼻下には口髭をたくはへてゐた。つまり、この髭がなかつたなら、貴族たちは彼が勤めてゐたのは歩兵隊だなどと思ひこまないにも限らなかつたからである。彼はその歩兵隊のことを輕蔑して、時にはテクテク聯隊だの、時にはまたテク助部隊だのと呼んでゐたものである。彼はまた多勢、人の寄る定期市でさへあればどんな定期市へでも出かけて行つた。さうした定期

市へは、娼や連だの、子供たちだの、娘っ子たちだの、肥つちよの地主連だのから成る露西亞の臟物とでもいふべき手あひが、幌馬車や、三輪馬車や、旅行馬車や、さては誰もが夢にも思ひがけないやうな箱馬車を仕立てて遊山気分で乗りつけて来たものである。彼は騎兵聯隊が駐屯するところを嗅ぎつけると必らず、士官諸公と面接するためにそこへ乗りつけて、彼等の面前で以つて極めて身輕に、自分の乗つて来た輕快な幌馬車なり彈機附馬車なりから、ひらりと飛び降りて、忽ち彼等と知り合ひになつてしまつたものだ。この前の選舉の折りに、彼は貴族連に素晴らしい午餐を變應して、その席上で、もし自分が議長に選ばれた曉には、必らずより良き地歩を貴族たちに獲得させると聲明した。概して彼は、その界限の郡や縣でよく言はれてゐるやうに、如何にも大旦那風に振舞つてゐた。かなり綺麗な女を娶り、それと同時に妻の持參金として二百人の農奴と何千留かの資本金を手に入れた。その現金は忽ちにして、實際すぐれて立派な六頭の馬と、扉に用ゐる金被せの錠と、屋内用の手飼ひの猿を手に入れ、佛蘭西人の執事を雇ふためにすつかり使ひ果されてしまつた。二百人の農奴の方は、彼自身の所有にかかる二百人のそれと共に、或る商取引の目的で農工銀行へ抵當に入つてゐた。一口に言へば、この男は如何にも地主として申し分のない……相當な代物であつたのだ。尙この他に將軍邸の午餐會には若干の地主連がつかつてゐたけれど、それについては別に取り立てて言ふほどのこともない。爾餘は残らず同じ聯隊

の軍人ばかりで、中に二人の佐官がゐた——大佐と、かなりでぶでぶ肥つた少佐がそれである。當の將軍は、がつしりしてやはりでぶぶり肥つてゐたが、しかし、士官連の評判では、上官としてなかなか立派な人物であつた。彼はかなり太い、どつしりした低音で話した。さて、午餐の料理であるが、それは實に素晴らしいものであつた。鱈魚肉、白蝶鮫、小蝶鮫、野雁、アスパラガス、鶉、鷓鴣、鰻といつたもので、これらの料理は板前がまだ昨日から一切熱いものは口にせず、また彼の手傳ひとして四人の兵士が庖丁を手につびてフリカッセやジェレエを拵らへるために立ち働らいたことを立證してゐた。數限りないポルドー酒の細長い饅や、マデイラ酒の頸の短かい饅、晴れ渡つた夏の日、ずつと開け放した窓、氷を盛つた食卓の上の皿、嵩ばつた燕尾服を着たお客のくしゃくしゃになつた胸板、ともすれば將軍の聲とシャンパンを注ぐ音に掻き消され勝ちな相錯綜する會話、——それらのすべてが互ひに反響し合つた。食事が終ると一同は、胃の腑の中に快よい重苦しさを感しながら席を起つて、長短さまざまな羅字のついた煙管で一服すひつけ、珈琲の茶碗を手にして、ポーチへ出て行つた。

『それぢやあ一つ、御覽を願ふことにしますか。』と將軍が口を切つた。『ねえ君、御苦勞ぢやがね、』と、彼は自分の副官の方へ振り返つて言ひ足した。その副官といふのは小氣味の好い顔つきをした、なかなか如才のない若者であつた。『ここへあの栗毛の牝馬を曳き出すやうに吠

ひつけてくれんか！ さあ論より證據、皆さん御自身で御鑑定を願ひますかな。」 茲で將軍は煙草を一眼くつと吸ひこんでから、ばつと煙りの輪を吹いた。『尤もまだ、十分に手入れがしてないんですがね。實にこの町はなつちよらん！ 厩舎ひとつ碌なのがないうんぢやから。だが、あの馬は、スパッ、スパッ、實に申し分のないやつです。』

『ところで閣下は、もう餘ほど前から、スパッ、スパッ、それをお飼ひになつてをられるのでございますか？』と、チェルトクーツキイが訊ねた。

『スパッ、スパッ、スパッ、スパッ……、いやなに、そんなに永くもならないですよ。さう、あれをわしが飼養所から引き取つてから、まだ二年ばかりにしきやなりませんかな。』

『で、調教ずみの手にお入れになりましたのですか、それともこちらでお乗り馴らしになつたのでございますか？』

『スパッ、スパッ、スバ、スバ、スパ、スバ……、いや、こちらで乗り馴らしましたのぢや。』かう言ひ放つと同時に、將軍はその全身を煙りの中へ掻き消してしまつた。

その間に、厩舎の中から一人の兵卒がばつと躍り出し、憂々たる蹄の音が聞え出して、やがてもう一人、白い上つ張りをまとひ、黒い大きな口髭を生やした兵卒の姿が現はれた。彼は、何かに驚ろいて物怯ぢした馬の轡をとつて曳き出して來たのであるが、その馬はいきなり首をもたげ

ると同時に、地面へ這ひつくばるやうにした兵卒を、その口髭もろとも宙へ釣りあげないばかりにした。(はいよ、はいよ、アグラフェーナ・イワーノヴナ！) さう言ひながら、彼はその馬をポーチの傍まで、やつと曳つばつて來た。

その牝馬にはアグラフェーナ・イワーノヴナといふ名がつけてあつたのである。まるで南國の美人のやうに、見るからにがっちりして野生的なその悍馬は木造のポーチに蹄をかけて憂と音を立てたが、急にそこへ立ちどまつた。

將軍は煙管を口からはなして、さも恐悅の態でアグラフェーナ・イワーノヴナをつくづく眺めはじめた。大佐の方はポーチから下へ降りて、アグラフェーナ・イワーノヴナの鼻面に手をかけた。少佐は少佐で、アグラフェーナ・イワーノヴナの脚を軽く叩き、他の連中は、時どき舌打をしながらそれに見入つてゐた。

チェルトクーツキイはポーチを降りて行くと、彼女の尻の方へ廻つた。例の兵卒は直立不動の姿勢で馬の轡をとつたまま、まるで躍りかかつて行かうとでもするやうな面構へで來客の顔を眞正面から睨みつけてゐた。

『なかなかどうして、實に御立派なものですなあ！』と、チェルトクーツキイが言つた。『形の素晴らしいお馬です！』とところで閣下、脚なみの方は如何ですか？』

『脚つきもこやつなかなか素晴らしいんですがね、ただその……さつぱり譯がわからんのが……この看護卒の馬鹿ものが、これに何かの丸薬を吞ませをりましてな、これでもう二日ばかりといふもの、噎めの連發をやつちよる始末ですぢやて。』

『いや、なかなかどうして、實に美事なお馬ですよ！　ところで閣下、お似合ひの馬車は御所持でいらつしやいますか？』

『馬車——と言はれるのかな？……したが、これはその、乗馬なんですぞ。』

『いや、それはもう承知してをりますがね、閣下、わたくしがお訊ねいたしましたのは、つまりその、この馬にではなく、他の馬に釣り合ふやうな馬車を閣下が御所持になつてをられるかどうか、それをおうかがひ致した譯なのでございますよ。』

『成程、したが、わしなぞはまだ馬車を持つほどの柄ではありません。尤も正直なところを申しあげれば、わしも大分まへから當節の幌つきの輕馬車（軽馬車）といふやつを一臺手に入れたとは思つてをりますがね。そのことをいま彼得堡にゐる舍弟のところへ言つてやつてあるのがやが、舍弟の奴、送つてよこすやらよこさぬやら、その邊のところは、なんとも分つたものぢやありませんて。』

『閣下、どうもわたくしの考へでは、』と、大佐が口を出した。『輕馬車と申しますれば、先づ

維納製より上等なものは他にないやうに思ひますが。』

『それあ、君の言ふことは重々もつとちやね、スパツ、スパツ、スパツ。』

『ところが閣下、實は手前どもに一臺、飛びきり上等の輕馬車（軽馬車）がございまして、それが正真正正銘の維納製なんですてな。』

『どれがですか？　あんたが乗つて來られた、あの馬車（馬車）がそれなんで？』

『どういたしましたか、あんなものぢやありませんよ。あれは平常（平常）ちよいちよい乗り廻すための、ほんの自家用でございしますがね、今お話しいたしました方は……それあ實に素晴らしいやつでして、まるで羽毛のやうに輕くて、あれに若し閣下がお召しにでもなりませうものなら、それこそ、甚だ不躰けな申し方で恐縮ですが、ただもつ、閣下を搖籃（搖籃）に入れて乳母（乳母）が揺ぶつてゐるとでも申す他はないと思ひますよ！』

『それぢやあ、さぞかし乗り心地が好いちゆう譯ですか？』

『とても、とても、その乗り心地の好いことと申しましたなら、座褥（座褥）にしても彈機（彈機）にしても、何から何まで、まるで繪に描いたやうな出來ばえでございまして。』

『成程、それは好いですな。』

『ところが、そのまた構造と申しましたら！　それこそ、閣下、わたくしはまだ、あれほどの

ものにぶつかつた感じがございませんで。手前が軍隊に勤めてをりました頃のことでございますが、そいつの座褥クッションの下の箱へラム酒を十本に煙草を二十斤から入れておいたものでございすが、まだそればかりではなく、そのころ持つてをりました六着からの軍服に、下着に、煙管を二本、それも閣下、飛びきり長いやつなんでございませよ、それらを残らず納めましてもまだまだ牡牛をまるまる一頭ぐらゐは、乗せる餘地をたつぷり残してゐる始末なんでして。』

『そいつは宜しいですな。』

『手前は閣下、そいつに四千留から拂ひましたよ。』

『値段から推しても、立派なものに違ひありませんな。で、あんたはそれを御自身で購められたのですかな?』

『いいえ、その、閣下、實は偶然、手に入れたのでございまして。それを買ひ入れましたのは手前の友人なんです、それがまた稀に見る人物でして、手前とは竹馬の友でございましたが、きつと閣下の御意にも叶ふ奴だつたと存じます。手前と奴とは、貴様のおれのもの、おれのは貴様のものといつた間柄でした。わたくしは骨牌で賭けをしてあの馬車を捲きあげてやつたといふ譯なんです。ところで閣下、如何なものでございませう、明日、拙宅へ午饗に御來臨の榮を賜る譯には參らないでせうか? その序でに一つ馬車の方も御覽いただきたく存じます。』

するが。』

『さあ、何とお答へしたものでやらう。わし一人だけと言つては、どんなもんぢやらう……。どうぢやな、一つ他の將校諸君も一緒に招きにお預るといふ譯にはいきませんかな?』

『願つてもないことで、他の將校さん方にも是非、御來臨を願ひたく存じます。皆さん、わたくしは枉げても皆さんが陋宅へ御光來下さいますことを無上の光榮と致しまするので。』

大佐や少佐を初め、その他の士官連も慇懃な辭儀をもつて謝意を述べた。

『閣下、手前は常々からかう考へてをるのでございませ。つまり、物を求めるなら、必らず上等の品を購ふに限りまして、安物買ひは結局虻蜂とらずに終ると、さう信じてゐるのでございませ。ところで明日、御來臨を願へましたならば、手前が家政上の問題につき自身にもしましたところの、ある論文めいたものを御笑覽に供するつもりでございませ。』

將軍はちらりと相手を見やつて、口からぶうつと煙を吐き出した。

チェルトクーツキイは、わが家へ將校連を招待したといふことに非常な満足を感じた。彼は早手まはしに頭の中で肉饅頭やソースを眺らへることを空想しながら、さも嬉しさうに將校連を眺め廻した。將校連の方でもやはり同じやうに、何となく彼に對する好意が倍加したやうに感じられて、それが一同の眼つきにも、わづかな動作のうちにも、半ば辭儀のやうな形で仄見えてゐた。

チェルトクーツキイは妙に寛ろいだやうな氣持で前へ進み出たが、その音聲は却つて調子が低かつた。——あまりの嬉しさに語勢が打ちひしがれた形である。

『御來訪の礎いしには、どうか閣下、一つ荆妻の方をもお見識り願ひたいと存じますが。』

『いや、大いに欣快とするところですか。』と、將軍は口髭をひねりながら答へた。

チェルトクーツキイはその言葉をしほに早速わが家へ歸つて、豫め明日の午餐にお客を招く萬端の準備を整へておかうと思つた。で、彼は方に帽子を手に取らうとしたのであるが、不圖したことからまたそこに坐りこんで、彼はそれからなほ數時間のあひだ居残つてしまつたのである。さうかうするうちに部屋の中には早くも骨牌のテーブルが並んでゐた。間もなく來客一同はヴィストをやるために四つの組に分かれて、將軍の居間の方々の隅にめいめい陣取つてゐた。

灯がともされた。チェルトクーツキイは、やや暫らく、ヴィストの仲間に加はつたものかどうかに迷つてゐた。が、士官連が勧め始めると、つきあひの掟てに従はないのは大變わるいことやうに思はれだして——ずるずるに尻を落ちつけてしまつた。いつの間にか彼の前にはブンシュのコップが置かれてあつた。彼はそれをいきなり、無我夢中で飲みほしてしまつた。ローベルを二回やつたところで、チェルトクーツキイはまたしても手許にブンシュの注がれたコップのあるのに氣がついて、それもやはり、夢中で飲みほしたが、それに先だつて彼は、(さあ、これで失禮

しますよ、皆さん、わたくしはもうお暇しなくちやなりませんから、ほんとにお暇しなくつちやあ。』と言つた。しかし次ぎの回にも彼はまた腰を落ちつけてしまつた。その間に、部屋のおちこちの隅で取り交はされてゐた談話は、全然個人的な問題に轉じてゐた。ヴィストをやつてゐる連中はかなり靜かであつたが、勝負に加はらないで、脇の長椅子に腰をおろしてゐた連中がめいめい勝手な話をしてゐたのである。一方の隅では、騎兵の二等大尉が小脇にクッションをあてがひ、口に煙管をくはへたまま、なかなかの雄辯をふるつて、自分の艷種を吹聴しながら、彼のぐりりを取り圍んだ一團の人々をすづかり煙に巻いてゐた。並はづれに丸々ふとつて、ちよつと二つの張りきつた馬鈴薯でもぶらさげたやうな恰好に見えるちんちくりんな手をした一人の地主はいやにやにやした顔つきでそれに聴きとれてゐたが、時々だつ廣いその背中へ短かい片手をまはしては、そこから煙草入れを取り出した。また他の一角では、騎兵中隊の教練について、かなり激しい議論が闘はされてゐた。すると、もうその時、女王の代りに二度までも兵士を投げたりしてゐたチェルトクーツキイが、だしぬけに他人の談話へ口を挿んで、(一體それは何年のことですか?)とか、(何聯隊でしたか?)などと叫んだものであるが、その質問が、時にはまるで見當ちがひであることには、一向に氣がつかなかつた。やつと、夜食が出る數分前になつてヴィストは終つたが、しかし勝負の話は尙もつづいて、一同の頭はヴィストのことで一杯になつてゐるか

に見えた。チェルトクーツキイは、ずるぶん勝つたつもりであつたが、手許には錠一文のこつてゐなかつた。で、卓を離れて起ちあがつた後も、まるでポケットの中のハンカチまですつてしまつた人間のやうな状態で、彼はやや久しくぼんやりと立ちつくしたものであつた。その間に夜食が出た。言ふまでもなく、酒には事を缺かなかつたし、それにチェルトクーツキイの左右には酒饅が立ち並んでゐたので、ついつつかり彼が時々自分で勝手に手酌を傾けたのも無理のないことである。

話は食事中もだらだらと長くつづいたが、しかしちよつと妙な方面へ話題が轉じて行つて、まだ千八百十二年の役のころ現役にゐたといふ一人の大佐が全然ありもしない會戰の話を一席やつたが、その後で、全くどういふ理由からか、さつぱり分らないけれど、玻璃饅の栓をとりざま、それを麵麩菓子の中へつぶりと突きさしたものだ。さて、一言にしていへば、一同が散會しはじめたのは、もう三時ごろで、馭者の中の或るものたちは自分の主人を、まるで買物の包みかなんぞのやうに抱きかかへて受け取らなければならなかつた。チェルトクーツキイも、その貴族主義にも拘らず、馬車に乗つてからは、ふらりふらりと大きく首を左右に揺ふりながら、おつそろしく低く體を外へ乗り出し乗り出したので、家へ歸り着いた時には、その口髭に二つの牛蒡の種をくつつけてゐたといふ爲體である。

邸では誰ひとり起きてゐるものがなかつた。馭者がやつとのことで侍僕を探しあてると、その侍僕は主人を案内して客間を通り抜けたところで小間使の手に彼を委ねた。チェルトクーツキイは小間使の介添でやうやく寢室へ辿りつくと、雪のやうに眞白な寢巻を着て妖艶な寢姿で臥つてゐた、うら若い綺麗な妻君の傍へごろりと身を横たへた。良人が寢臺の上へばつたり倒れ伏した物音に、彼女は不意に眼をさました。伸びを一つして、睫毛をあげると、三度ほど續けざまに眼を醒めるやうにしてから、少し不興げな微笑を浮かべながら、彼女はぼつちり眼を開けたが、けふに限つて良人が何の愛撫も示さうとしないのを見て取ると、忌々しさに彼方へ寢返りを打つて、その瑞々しい片頬を手の上へ押しあてたまま、良人について間もなく寢入つてしまつた。

ぐうぐう鼾きをかいてゐる良人の傍らで、若い女主人が眼をさましたのは、田舎では決して(早い)とは言へない時刻であつた。昨夜良人が歸宅したのはもう四時過ぎだつたことを思ひ出すと、彼女はそれを揺り起こすのに忍びず、良人が彼得堡から取り寄せてくれた夜靴スリッパを突っかけ、彼女がそれを身に纏ふとまるで流水を打ち掛けたやうに見える眞白な婦人短衣コトチカを引っかけ、自分の更衣室へ入り、彼女自身と同じやうにすがすがしい水で顔を洗ひ、それから化粧臺へと近づいた。彼女は鏡に二度ばかり己が姿をうつして見て、今日はたいへん自分が綺麗に見えるやうに思つた。一見、何の意味もなささうなこの事情が、彼女をかつきり二時間だけ無爲に鏡の前に坐



りとほさせたのであつた。やうやくのことで、非常に愛くるしく身装を整へると、彼女は庭へ涼みに出た。それは時あたかも、南國の夏の眞晝に於いてのみ誇り得るやうな素晴らしい時刻であつた。正午に近い太陽は焼きつけるやうにさんさんと輝やいてゐたが、小暗く生ひ繁つた並木の蔭の漫ろ歩きは爽けく、太陽に蒸された花々はその芳香をいや増してゐた。美しい女主人は、もう十二時にもなるのに良人がまだ寢坊をしてゐることなどはすっかり忘れてしまつた。はやくも庭の裏手にある厩舎からは、二人の馭者と一人の馬丁の、晝飯の後の午睡の躰きが彼女の耳許まで聞えて來た。しかし、彼女はじつと、木の間がくれに大街道を見透かす蒼蒼たる木立のなかに坐つたまま、寂として人つ子ひとり通らない街道の方を、ぼんやり眺めてゐたが、不圖、遠くに舞ひあがつた一陣の砂埃りが彼女の注意を惹きつけた。じつと眼を凝らした彼女は間もなく數臺の馬車の姿を認めたのである。先頭に立つてゐるのは、すつかり幌を疊んだ二人乗りの輕快な輕馬車で、それには日光をうけてキラキラ光る太い肩章をつけた將軍と、それと並んで大佐が同乗してゐた。その後ろには四人乗りの馬車がつづき、それには少佐と例の將軍の副官が、相向ひに坐つたもう二人の士官と一緒に乗つてゐた。その馬車の後にはまた、くだんの、誰ひとり知らぬものない聯隊用の彈機附馬車がつづいてゐたが、今日は肥つた少佐が一人占めにしてゐた。彈機附馬車の後を追つて來るのは四人乗りの旅行馬車であつたが、それには四人の士官が納まり、

その間にもう一人の士官が割りこんでゐた。旅行馬車の後ろからは、それぞれ黒斑らの栗毛の素晴らしい馬に跨がつた三人の士官の姿が現はれた。

『うちへ來るのではないかしら?』と、この家の女主人は心に思つた。『まあ、大變だ! 本當にさうよ——あの人たち、橋の方へまがつたもの!』彼女はあつと叫んで、手を一つ拍つと同時に、花壇や花の上を踏み越えるやうにしながら一目散に良人の寢室へ駆けつけた。良人は正體もなく眠りこけてゐた。

『起きてよ、起きてよ! ね、早く起きてよつたら!』彼女は良人の手を掴んで曳つぱりながら叫び立てた。

『ああ?』と、チュルトクーツキイは、伸びをしながら呟やいただけで、眼はあけなかつた。

『起きて下さいつたら、うちのねんねさん! ね、お分りになつて? お客様よ!』

『お客? お客様つて、どんなお客だい?……』さう言ふと彼は、まるで犢が鼻面を押しつけて母親の乳首をさぐる時のやうに小さい鼻聲を立てた。『む……』と彼は呟やいた。『さあ、いい子だから頸をお出し! 接吻してあげるから。』

『あなた、起きて頂戴よ、後生ですから、早くさ! 將軍が士官さんたちを連れていらしたのよ! あら、いやだ、あなたのお髭に牛蒡の種がくつちいてゐるわ!』

『將軍？ ぢやあ、もうやつて来たのかい？ 仕様がないなあ、本當に。それにしても、どうして誰ひとりおれを起してくれなかつたのだ、仕様のない！ いったい午餐はどうしたんだ、午餐は？ もう何もかもちやんと支度は出来てるのかい？』

『午餐ですつて？』

『ちやんと、おれが伝ひつけておいたぢやないか？』

『あなたが？ だつてあなたは夜半の四時ごろお歸りになつて、いくらあたしがお訊ねしても何ひとこと仰つしやらなかつたのですもの。本當にしやうのない方だけれど、お氣の毒に思つてあたし故意とお起ししなかつたのよ——だつて、あなたはちつともよくお寢れになれなかつたんでせう……』この最後の言葉には、ひどく惱ましげな訴へるやうな響きがこもつてゐた。

チェルトクーツキイは眼を皿のやうにして、まるで雷電にでも撃たれたもののやうに、暫しはばつたり寢臺の上にへたばつてゐたが、やがて、作法も何も忘れて、シャツ一枚のまま寢臺から跳ねおきた。

『あつ、しまつた！』と、彼は自分の額を叩いて言つた。『奴らをおれは午餐に招待してあつたんだよ！ どうしたらいいだらう？ まだやつて来るのに少しは間があるのかい？』

『知りませんわ、あたし……もう今すぐにもお見えになつてよ。』

『なあ、おい……かうなつたら居留守をつかふより仕様がないなよ！……誰かそこにあるのか？ ねえや！ ちよつとここへ来てくれ——馬鹿、何をびくびくしてるんだ？ 今すぐに將校連がここへやつて来るんだ。それでお前、みな様はお留守でございますつて言ふんだぞ、朝からお出ましで、ちよつとはお歸りになりませんか……いいかい、判つたね？ 下の者にもみんなに、さう言つておけ、さあ早く出て行つて！』

かう言ふなり彼は、逸はやく寛衣を引つ摺みさま、ここなら安全第一だとばかり、馬車小舎へ身を潜めるために駆けつけた。しかし、さて小舎の片隅に立つてみると、ここでもどんなことで見つけられないにも限らないやうに思はれた。(うん、まだこの方がいいわい)不圖、彼はさう思ひつくと、咄嗟に、傍らにあつた輕馬車の折疊み式階段を引き出して、その中へ飛びこみさま、ばたんと後ろで扉を閉めきつて、更に一層身の安全のために、膝掛と藪草を引つかぶり、寛衣にくるまつた體を曲げるやうにして、じつと息を殺した。

一方その間に、馬車の一隊は支關のポーチへ乗りつけた。

將軍はやをら降り立つと、ぶるつと一つ體を揺ぶつた。その後ろから——大佐が自分の帽子の羽根飾りを兩手で直しながら降りた。ついで彈機附馬車からは、ふとつちよの少佐がサーベルを小脇にかかへて出て来た。更に旅行馬車からは、瘦せぎすな中尉連が、彼等の片傍へ割り込んで

同乗して来た旗手と共に降りた。最後に馬上ゆたかに乗りつけた士官たちが鞍から降り立つた。

「相僧と主人が不在でございまして。」と、従僕が支關へ出て、言つた。

「何、——御不在だと？　それでも、午餐までには歸られるのぢやらう？」

「いいえ、戻りませんのでして。今日は一日がかりでお出ましになつたのでございます、明日の今時分にはお歸りかと存じますが。」

「いやはや！」と、將軍が言つた。「一體どうしたと言ふんだらう？……」

「どうも、あれは冗談だつたらしいですな。」さう、笑ひながら大佐が言つた。

「まさか、幾ら何でもそれは怪しからんぢやないかね？」と、將軍は不満の色を現はして續けた。「ちえつ……碌でもない……招待が出来んのなら出来んで、何も拜み倒すことはいらんぢやないか？」

「まつたくですよ、閣下、一體どうしてこんなことをするのか、頓とその理由がわかりませんよ。」と、一人の若い士官が相槌を打つた。

「何だと？」と、何時も尉官と話をする時にこの疑問詞をつかふ癖の將軍が聞き咎めた。

「閣下、わたくしは、どうしてかういふ仕打が出来たものだ！　と申したのでございます。」

「まつたくぢや……何か都合のよくないことがあつたのなり……せめて、さうと知らしてくれ

るか、さもなければ、初めから来てくれいなどは言はんことぢや。」

「閣下、どうも致し方ありませんから、ぼつぼつ引きあげることに致しませうか！」

「勿論、何とも手段はないさ。だが、主人はをらんでも、馬車を見るだけのことなら差支へあるまい。恐らくそれに乗つて行つた譯ぢやなからうからなあ。おい誰かをらんかね？　君、ちよつと、こつちへ来てくれんか！」

「何か御用でございませうか？」

「君は、馬丁かね？」

「はい、馬丁でございます、閣下。」

「新調の輕馬車とかを一つ見せてくれんかね？　近ごろ御主人がそれを求められたといふぢやないか。」

「ああ、それでございますしたら、どうぞ馬車小舎の方へおいで下さいまし。」

將軍は士官連を引きつれて馬車小舎へと行つた。

「では一寸お待ち下さいまし、少し曳き出して見ますから——ここではどうも薄暗つございませうから。」

「澤山ぢや、澤山ぢや、そのまま結構ぢやよ！」

將軍と士官連は馬車のぐるりを一巡して、仔細に車輪や弾機スプリングの具合を檢分した。  
 『ふん、別に變つたところもないぢやないか。』と、將軍が言つた。『極くありふれた輕馬車ぢやて。』

『實にひどい馬車ですよ。』と、大佐が相槌を打つた。『ちつとも良いところなんかないぢやありませんか。』

『閣下、どうも、こんなものが四千留なんてする筈はないと思ひますが。』と、若い士官の一人が口を入れた。

『何だと？』

『閣下、わたくしはその、こんな馬車は決して四千留なんて値打はありさうにないと、かう申しあげてゐるのでございますよ。』

『何の、四千留どころか！ これあ、二千留もしやせんぞ。全くのゼロぢや。何ぞ内部なかにでも變つたところがあるのぢやらうか……おい君、ちよつとその蔽革をとつて見てくれんか……』  
 と、その時、士官連の眼に映つたのは、寛衣にくるまつたまま、えらい恰好でちぢまつてるチュルトクーツキイの姿であつた。

『おや何だ、あんたはこんな處にをられたのか……』と、啞然として將軍が口走つた。

さう言ふなり將軍は、直ぐさまばたと扉をしめて、再びチュルトクーツキイを膝掛で蔽つたまま、士官諸氏をひきつれて家路についた。

譯註

肖像畫

- 註
- 一 ホズレフ卿 (ホズレフ・ミルザ) 有名な波斯の政治家。一八〇四年に埃及王になつたが二年の後土耳其の  
勇將メフメッド・アリのために王位を退はる。(一八五五年歿)
  - 二 ミリクトリーサ・キルビーチエヴナ 露西亞の昔話『ボブ王子物語』に出て来る美しい王女。
  - 三 エルスラン・ラーザレギツチ 露西亞の古い武勇談『エルスラン物語』の主人公で、剛勇無双の勇士。  
フオマとエリョーマ 露西亞の滑稽な民話にうたはれてゐる善良で馬鹿な二人の田舎者。
  - 四 白紙幣 二十五圓紙幣の異名。
  - 五 グキード (レニ) 伊太利の畫家。(一五七五—一六四二)
  - 六 ブシヘーヤ 希臘神話に現はれる絶世の美女。エロスと戀におちたためエロスの母ゼエネーラに憎まれて、様々の  
報苦を嘗めるけれど、エロスに授けられて不死の身となり、神の列に入る。
  - 七 ワザリーリ (ゲオルギイ) 伊太利の畫家にして建築家。『著名美術・建築家列傳』の著書がある。(一五一—

—一五七四)

二元 チェルヲーネツ ビョートル一世時代に制定されたル・ブリ金貨の名稱。

三 クトウーゾフ公爵 (ミハイル・イワリオノギツチ) アレクサンドル一世時代の元帥で、かの有名な

一八一二年の役に露西軍總司令官としてナポレオン一世の率ゐる佛蘭西軍をボロヂノに迎へ撃つた名將。(一七四  
五—一八一三)

四 アエネーラ (ヴァイーナス) 希臘神話中の、愛と美の女神。ジュピターとダイアナの間に生れた娘であるが、

一説では海の水泡より生れたとも言はれてゐる。エロスの母。

五 テニエール 和蘭の畫家。ルーベンスの弟子で宗教畫と農民生活を題材とした繪で名高い。(一五八二—一六

四九)。その子ダギッド・テニエールも父以上に著名な畫家で、製作の感しいことで驚異とされてゐる。(一六一〇  
—一六九〇)

六 コリンナ 紀元五世紀時代、希臘に生れた女詩人。

ウンヂーナ 水中に棲む女體の妖精で、人間と戀愛關係を結ぶと言はれ、ルサルカ(ニンフ)と同じやうなもの。

獨逸の作家ラモット・フーケ(一七七七—一八四三)の作に『ウンヂーナ』といふ敘事詩がある。

アス・バージャ 紀元前四七〇年頃に生れた希臘の白拍子。美貌と才能に恵まれ、アテネに於ける當時の名士は彼

七 メツエナート 皇帝アウグスト時代に於ける羅馬帝國の政治家。學問や藝術の擁護者として名高かつたため、そ

女の家を會所としてゐたと言ふ。

八 グリーフ 動物を守護するといはれる神話ちゆうの動物、前半身が鷲で後半身が獅子の怪物。その形を彫刻して建

築の裝飾等に用ゐる。

九 プンシュ ボンス又はボンチに同じ。火酒にレモン汁や砂糖を混じたアルコール飲料。

十 グランデソン 十八世紀の英國の作家リチャードソンの小説の主人公で、善行の權化のやうな人物。

十一 家妖 (ドモライ) スラヴ民族に信奉されてゐる妖怪。家の中などに棲んで、その家の家族や家畜を保護するが、

馬車

十二 キッセリ ジェリイが葛湯に似た一種の料理。

十三 ヴイスト トランプ戲法の一つ。

ローベル トランプの(銀行)勝負の名稱。

十四 千八百十二年の役 ナポレオン一世が大軍を率ゐて露西に侵入し、クトウーゾフ元帥がボロヂノにそれを退却

した有名な大會戰のこと。

割當事務所  
譲渡圖書

昭和十二年二月二十五日 第一刷發行  
昭和二十三年十月十日 第七刷發行

肖像畫・馬車

定價四拾圓



譯者 平井 肇

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京都西多摩郡澁村根ケ布三八五番地 山田 一雄

發行所 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波書店

會員番號A一〇九〇〇四號

株式會社大化堂印刷・製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。譬ては民を愚昧ならしめるために愚藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書と少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に陳なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大體生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に贈すと所稱する全案が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の譯圖企圖に破産の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず諸書を整頓して數十冊を強ふるが如き、果して其揚賣する愚藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推察するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の資務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より應じて來た計畫を眞重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を關活向上の資料、生活批判の原動力を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては眞理最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に參加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に取て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのりるはしき共同を期待する。

昭和二年七月



終

